
使命を終えた 天使の使命

ジグザグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使命を終えた 天使の使命

【Nコード】

N9908M

【作者名】

ジグザグ

【あらすじ】

100年前大陸を覆う結界が壊れ外の大陸から大量の魔物が襲ってきた。

そんな外の脅威から大陸を守るため、守護者となり結界を張った一人の少女。

大陸全土を覆う結界は100年間維持され、新しい守護者へと受け継がれる。

そして守護者は役割を終え、この世を去っていく筈だった……

しかしその少女は生きていた。親も兄弟もだれもない。自分を知る人が全ていなくなってしまった世界で少女は2度目の人生を歩む。

プロローグ（前書き）

初めまして！

初投稿になります。

小説を書くのは初めてなのでお見苦しい所もあると思いますが、
長い目で見てやってください。

プロローグ

「……ごめんなさい」

鬱蒼と生い茂る森の中で、独り言の様に謝罪をする一人の少女。周囲には明かり一つ無く、月の光も届かない闇夜の中、少女を中心とした辺り一面には魔物の死骸で溢れていた。

まだあどけなさの残る僅か10歳の少女。腰の先まで伸びた銀色の髪に透き通った青い大きな瞳。同世代の女の子よりもやや小柄なこの少女は可愛らしいという言葉がよく似合っていた。

おそらく後数年も経てばあどけなさも消え、見目麗しい美しい女性へと育つ事を予感させる、しかし今はその表情を暗く沈めており、本来の魅力を半減させていた。

「……ごめんなさい」

周囲の惨状を見て胃の中の物を全て吐き出してしまいたい衝動に駆られる。しかしこれは自分がやった事だと思い出し、吐いてはいけないと思いとどまる。

ましてや謝るなんて……自分が殺しておいておかしい話。思わず自嘲するような笑みが浮かぶ。

相手は人間じゃない魔物。それも一体二体ではなく何十といった魔物たち。

この先にある町を襲おうとしていた事に気づいた少女は、本来の目的地へ向かうのを一時中断して、彼らの下へ向かった。

大きな爪と牙を持った四足で行動するガラムと呼ばれる魔物。常人なら一瞬で周囲を囲まれ、八つ裂きにされてしまっただろう相手。しかし彼らの爪も牙も少女に届くことは無かった。

少女の張る魔法障壁を彼らは破る事ができず、また少女の攻撃を彼らは防ぐ事もかわす事もできなかった。

それは一方的な虐殺だった。

彼らの事を人々は魔物と呼ぶ。

強大な力を持ち、人を襲う理性無き邪悪なる獣。

しかしそれが間違いだという事を少女は知っていた。今のガルム達が町を襲う気だった事は事実だろう、しかし、魔物といっても理性がある者ものもいて、人と敵対するだけではないという事を少女はその身を持って知っている。

だからこそ、少女は彼らの命を奪う事にひどい抵抗感を示していた。とはいえ彼らを殺さなければ逆にあの小さな町は滅びていた事もまた事実。それを事前に防いだ少女は褒められるべきであれ、謝る必要なんてない。そんな風に割り切れたらよかったのだろう。しかしまだ幼い少女にはそれが出来ず、その小さな胸を痛めていた。

「……………」

それでも、いつまでもここで立ち止まってはられない。

こうして時間が過ぎれば、今度は別の町が襲われるかもしれない。

いつの間にか泣いていた瞳を両手でこすり、俯いていた顔を上げて前を見つめる。

そして歩き出し、森を抜けて街道に出た所で少女は森の方へと振り返った。

森のずっと向こうには自分が育ってきたお城がある。

けれどももうその姿を見えない。

お城での生活で思い出すのは両親、そしてたった一人の友人。

大切に育ててくれた両親

強大な魔力を持って生まれ、そのせいで周りから疎んじられていたけれど、それでも父と母は優しくかった。

どこかへ出かける時は、常に父と母が傍にいてくれて、周囲の視線から守ってくれていた。周囲の陰口や畏怖するような視線に晒されていた少女にとって、それは唯一の救いでもあった。

会いたい。

今すぐ会いに行きたい。

「……くっ……」

唇をぎゅっと噛み、泣きだしたくなる弱い気持ちを無理やり押さえつけ、やるべき事を思い出す。大切な人たちを守るために自分で決めた事。

本当は逃げ出したかった。

今すぐ家族の所へ帰って泣いて喚いて……そして抱きしめてもらいたかった。

けれど……逃げ出したらもっと悲しい事がおきるから。

だから、行こう。

守護者としてこの命を捧げる。

命令ではなく、初めて自分の意思で動く事を決めたのだから。もう家族に会うことは出来なくても、あんな悲劇を繰り返したくはな

いから。

そこには先ほどまでの暗い表情はなく、透き通った青い瞳には強い決意が感じられた。

そして少女は前を向き、歩き出す。

二度と振り返ることはなく、前だけを見据えて……力強く歩き出した。

ブログ（後書き）

すごい暗い感じになってますけど、話が進めば彼女も明るくなっていきます…

頑張りますので応援宜しくお願いします。

感想批評誤字脱字なんでもどうぞ！

第1話 2人の守護者

この世界はまるで鳥かごのようだ。
だれかがそういつていた……

まさにそのとおりなのだろう。

守護者の張る結界により守られているこの世界。

ユーゲンリッツ大陸

結界の外側の大陸にいる獰猛な魔物たちから人々を守るために作られた結界。

結界の端まで行けば、外の大陸を見る事はできる。

しかし、見るだけしか出来ない。

大陸全体を覆うこの強力な結界は、外からの侵入者を決して許す事は無く、中から外に出る事も許されない

守っていると同時に、私たちは閉じ込められているともいえる。

しかし、それでも人々は不自由だとは感じない。

元からそういうものだと思いきっているから、疑問にも思わないのだ。

「……もし結界を壊したらどうなるのかな」

不意にそんな事が頭によぎり苦笑する。

答えはわかりきっている。

外にいる魔物たちが人々を襲いにくる。

それを防ぐ為に結界はあるのだから。

100年に一度、聖地とよばれるこの神殿には強力な魔力が集まり、

守護者はその魔力を利用し結界を張る。

この強力な結界は次に魔力が溜まる100年後まで消える事はない。そして100年が経ち、結界が消える時にまた新しい守護者が再び結界を張る。

今日は100年振りに魔力がこの聖地に溜まる日。

また……………前守護者が亡くなる日でもある。

結界は己の命と引き換えに張られる。

それは決められたルール、いや……………呪い。

決して破られる事のない呪い。

守護者という名の体のいい生贄を捧げる呪い。

「仕方ない……………か」

そう仕方のない事なのだ。

誰かがやらなければならぬ。

そしてそれは誰でもいいわけでもない。

守護者足りえるのは王族の血を引く者のみ。

いや守護者を輩出できたから一族だからこそ王を名乗れたのか。

鶏が先か、卵が先か。

まあどちらでも変わりはない。

ただこのユーゲンリッツ大陸において王族を名乗れるのは守護者の一族のみ。

100年に1人、守護者を輩出する。

その代わりに私たち一族は聖都という国家を作り、王族としてこの大陸を支配している。

今年18歳になる守護者エリス「R」ランスター。

短く切りそろえられた銀色の髪に青い瞳。

どこか少年の様な顔つきをしているため男にも間違えられそうだが、今は真っ白なワンピースを着ているのでその心配は無い。

「まあ見てくれる人もいないわけだけど」

聖地に着くまでは護衛の兵と一緒にだが、中へ入るのは守護者一人。そして外から結界が張られるのを確認したのち、護衛は帰還する。彼らは護衛でもあり、監視でもあるのだ。

「はあ、まだ着かないのかな」

もう2時間は歩いている…さすがに疲れて来た。

「うー、水ぐらい持つてくるべきだったかなあ」

正直こんなに歩くとは思っていなかったから、手ぶらで来てしまった事に後悔する。

とはいえ結界を張ったら目覚める事はない。まさか聖地に「ごみ」を捨てるわけにもいかないし、結局は手ぶらで来るしかないんだけど…と、ぼやきながら変わり映えのしない石造りの通路を更に歩くこと数十分、ようやく目的地が見えてくる。

まるでダンスパーティーでも開けそうな大きな広間、その中心には複雑な模様を描いた光り輝く魔方陣。

そして、その上に寝ているのはエリスと同じく真っ白なワンピースを着た少女。

両手を胸の上のせて瞳を閉じているその姿はまるで聖書にでてる天使を連想させる。

「……こんなに幼かったんだ」

少女の周りには薄い空気の膜のようなもので包まれていて近づく事はできない。

しかし魔力の流れからしておそらくもう数時間で消えるだろう。

……それは、少女の死を意味する

「今までありがとうございます」

これまで私たちを守ってくれた少女に礼を言う。

勿論反応は無いけど、それでも言いたい気分だった。

本来守護者は普通20歳前後が選ばれる。

こんなに幼い子が守護者になる事は前例がない。

彼女は特別なのだ。

100年前、とある事情で結界を維持する事ができなくなってしまった事件があった。

それから数年間、人々は外から来る魔物たちに怯えながら生活していたという。

王族の血を持つものは勿論いたのだが、聖地に魔力が溜まる100年の節目から外れてしまった事で聖地の魔力が足りず、結界を張る事ができなくなってしまった。

外から来た魔物たちを相手に戦える人はいた事はいた。

聖都や大きな町には軍隊が存在したし、個人や少人数で組む傭兵や冒険者といった人達もいた……しかし、それでもまるで無限に存在するのではないかというほど圧倒的な魔物達の前に人々は絶望した。

そこで現れたのが目の前に居る少女である。

少女は歴代最強とも呼ばれた圧倒的な自らの魔力で足りない魔力を

補い、結界を再発動させたという。

とはいえ、当然既に内部に入ってしまった魔物たちを追い払う力は結界には無かったが、それでも新たな魔物が侵略してくる事はなくなり、人々は少なからず安堵した。

「言い伝えだと20歳になってただけどなあ……」

しかし、どう見ても20歳には見えない。せいぜい10歳といった所じゃないかと予想する。

まあ、おそらく聖都が偽造したのだろう。さすがに10歳の少女に大事な結界を託したと思われるのが都合が悪かったのか。

そんな事を考えていると次第に魔力が薄くなっていく。

もう間もなくかと思い、彼女の傍による。

「お疲れ様です、せめて安らかにお眠りください」

一礼し、そう少女に告げる。

そうこうしているうちに魔力が完全に消えていった。

そして少女は眠りについたまま身体は消え、この世を去っていく。

筈だった……

……しかし……

…なぜか……少女の瞳が……

ゆつくりと開かれていった。

「え？」

思わず間拔けな声が出る。ありえない自体に脳が追いつかない。

「う……うう……あ……」

そして聞こえてくる少女の悲痛なうめき声。

そこから思い浮かべる結論は

「生……きてる……どうして……？」

目の前の少女は生きているのだ。

まともに動く事は出来ず、惨めに地面を這いずり、喋る事も出来ず、無様にうめく事しかできない。

それでも、

それでも彼女は確かに生きていた。

「そ、んな……馬鹿な」

時間を掛けて、ゆっくりと顔を上げる少女と目が会った。

「あ……い……あ……」

頬はこけ、痩せすぎてもはや骨しかないような身体。

ずっと眠りにについていた影響だろう。満足に身体を動かす事も喋ることもできない。

しかし目が会ったその青い瞳には強い意志が感じられた。

生きたい　　と。

そう叫んでるように見えた。

第1話 2人の守護者（後書き）

文章が短い…そして話が一気に飛んで約100年後の世界へ（笑）
当方遅筆ですが頑張って書き続けますので、皆さんよろしくお願ひ
します。

感想批評誤字脱字なんでもどうぞ！

第2話 2人の守護者 - 2

少女は生きていた……

何故なのか解からない……どんな奇跡が起きたのか……これも少女の持つ強大な魔力の影響なのだろうか……

しかし、その奇跡も無駄になろうとしている……

少女は満足に動く事もできない様子……

本来なら手厚く保護して聖都へ案内するべきなんだと思う……

けど私には守護者としての使命がある。

それをおろそかにするわけにいかない。

私は守護者として今すぐ魔方陣の元へ行き、結界を張りなおす。

今はまだ魔力の残滓で結界は維持されているけど、1時間もすればそれも消えてしまう。

そうしたら又100年前の悪夢が繰り返される……それだけは防がないといけない。

だからこの少女を見捨てる？

満足に動く事もできない少女は、一人では生きていけない……
なによりこの聖地から出ることにすら不可能に近い。

少女はこのまま死んでいくの？

折角助かったのに……

神様が幼い少女に奇跡を与えて下さったのに！

今すぐ入り口まで急いで戻って護衛を呼んで来ようか？

けれど聖地の魔力が満ちているのは1時間程度…

身体強化の魔法を使用しても往復は無理だろう……

そもそも私は魔法が得意じゃない。

技術云々ではなくそもそも魔力量が少ないのだ。

魔力は回復はするけど、最大量が増えることは絶対に無い。

何か手はないか考えていると、一つだけ、たった一つだけ助ける手段を思い浮かぶ…

【転移魔法】

最低発動ランクCの魔法、私の魔法ランクはE。

これは私の魔力全てを使用して発動しない事を意味する。

…けれど足りない魔力を補う方法は存在する。

自らの命力…寿命で補う。

1ランク差であれば多少…おそらく数年程度の寿命の消費で済む…
…けれどそれが2ランク差となると…下手すると一気に数十年も
の寿命を失ってしまう。

それでも生きてさえいれば結界を発動させる事ができる。

寿命なんて私にとってはもう意味が無いようなもの…やってみる価値はある。

そう思ったら行動は早かった。

少女の前まで進み、うずくまっている少女を見下ろす。
少女は力尽きたのか、もうほとんど動いていない。
けれど呼吸はしている。まだ生きている。

大きく深呼吸して集中、そして少女の身体に向け両手を突き出す。
手と少女の間に金色の魔方阵が浮かび上がっていく。

転移魔法の魔方阵の形状なんてほとんどろ覚えでしかないけれど、
それでも人が使用していたのを必死に思い出して魔方阵をイメージ
する。

転移先は神殿の入り口、護衛がいる場所へ。

「……………っ！」

瞬間、頭に割れるように痛みが走る。そして全身が痛みで支配され
ていく

これ以上魔力を使っではいけないと身体が痛みという名の警報を鳴
らしていた。

「……………う……るさいっ！」

ガンガン鳴る頭に対して叫び、意識を再度集中させる。

プシュ…

大きすぎる魔力に耐え切れずにこめかみが切れ、血が流れる。

血は滴り落ち、真下でうずくまっている少女の真っ白なワンピース
へ赤い染みを作った……

まるで少女は助からない……………そう言われているような気がした……。

頭を振りかぶり、弱気になる心を押さえつける。
雑念を捨てて……改めて魔方阵を見る。

魔法は発動式を構成した魔方阵に対して、自らの魔力を融合させる
事で魔法は発動する。

融合の最も簡単な方法は……声。
自らの声に魔力を乗せ魔方阵にぶつける!!

「……お願い！ 飛んで!!」

叫びにも似た……魔力を込めた声を放つ。

パリン!

……その瞬間、金属が割れた様な音が広間に広がる……

「……あ……は……は……は……」

……もう笑っしかなかった。

あんなに痛い思いをして、

無理をして、

あれだけ大層な決意をしたのに。

少女ははまだ広場でうずくまっていた。

魔法は失敗した…

その場に両膝をつき、崩れ落ちるように倒れこむ。

私は……少女一人救う事すらできない…

「…………ごめんね」

自分の不甲斐なさに嫌気がさす。

少女一人救うこともできないなんて…！

少女の周りには、金色の魔方陣の残滓が舞っている。

少女一人のために…世界を危険にさらすわけにはいかない……

「…………ごめんね」

……瞳から涙がこぼれる。

…自分の弱さに……情けなさに涙が止まらない……

「……私は貴方を救えない」

代わりに世界を救おう。

貴方がしたように……私も世界を救おう。

「だから……ゆるして……」

ゆっくりと立ち上がり、両手で涙をぬぐって、もう一度少女の姿を見る。

せめて……その姿を目に焼き付けようと……

少女はうずくまっただまま動かない。相変わらず周りには魔力の残滓が舞っている……

「……え？」

その光景の異様さにようやく気づく。

魔力の残滓が舞っている

魔力の残滓が空中に留まっている事なんてあり得ない……

魔法が失敗した場合、魔力はすぐに空気中へ拡散して消えていく。

なのに……何故？

そして魔力は少女は次第に包み込んでいく。
その瞬間……少女の身体が光り始めた……

「…………これは……マナドレイン……？」

空気中の魔力を吸収し、自らの魔力に変換する技術。

そして光は次第に収まっていった。

「……………はあ……………はあ」

少女はふらふらとおぼつかない足元で、ゆっくりと立ち上がった。
く…………

魔力が回復しても身体が動けるようになるわけじゃない。

「……………あ……………」

少女は何かを喋っているようだけど、声は小さく聞き取れない…………

「はあ、はあ」

少女は息を荒げながらも、次第に動きがしっかりとしてくる。

そこですらやく少女のしている事に気づく。

「身体強化……………」

回復した魔力で身体強化の魔法を使用したのだ。

本来身体強化は戦闘中や移動の補助として使うべき魔法。

それで動けない身体を無理やり動かすなんて…………

少女がこちらを向き、おそらく先ほどから繰り返していただろう言

葉が、はっきりと聞こえてくる

「……ありがとう」

「……え？」

思わず聞き返してしまう。

すると少女はさっきよりもはっきりとした声で…

その表情には微笑みを浮かべながら

「助けてくれてありがとう」

そういつてくれた。

私はいつの間にか……また泣いていた。

第2話 2人の守護者 - 2 (後書き)

いまだに主人公の名前出ず…

感想批評誤字脱字なんでもどうぞ！

第3話 2人の守護者 - 3

身体がうまく動かない…

ここは……

考えようとしても……頭が上手く働かない……

とりあえず立とうとしてみるけど……失敗。

足に力が入らない……

……ここはどこだろう

なにもわからない……

どうしたらいいのかわからない……

私は一人では何もできない……

何も決められない……

私は無力だから……

……私は……

「……………う……るさいっ！」

頭上から放たれた言葉にはっとする。

周囲に魔力を感じる……

それほど大きくはないけれど……なんだか優しい魔力。

暖かい空気が周囲を包み込んでいく。

すると、さっきまでの不安な気持ちが薄れていくのが分かる

この魔法の効果は分からない……もう身体に力が入らなくて魔方阵を見ることもできない。

けれどこの人は私を助けようとしているのだろう。

真っ直ぐな気持ちで魔力を通して伝わってくる。

それは本当に久しぶりに感じる……人の優しさだった……

何をしようとしているのか？確認しようと思っただけかな力をふりしぼって顔を上げようとした、その瞬間

パリン！

魔力が消えていくのを感じる。

周囲に漂っていた優しい魔力が消えていく……

……魔法は発動しなかった。

「……ごめんね」

この人は誰だか判らない。

「……私は貴方を救えない」

魔法は失敗したのだろう。

けれど、この人の想いを無駄にしたいでなくて、なによりこの優しい魔力を無駄にしたいでなくて、私は無意識の内に魔力を吸っていた。

からっぽだった魔力が少しずつ回復していく。

魔力はほんの少しだったけど、胸の内が熱くなってくるのを感じる。

この人はただ純粹に私を助けようとしてくれていたのだろう。

体内に集まってきた魔力はとても優しくて、真っ直ぐな気持ちが詰まっていた。

…こんな風に家族以外の優しさに触れたのは初めてかもしれない

……みんな私を怖がって……離れていったのに

……この人は私を……

身体に力を入れる。

この優しい魔力が無くなるのは少し寂しい気もしたけど……でも、無理やり魔力で身体を動かす。

悲しい声で泣いているこの人に、伝えたい言葉があるから

「……あ……い……」

上手く話す事ができない……歯がゆかったけど、なんとか心を落ち着かせる。

落ち着いて、ゆっくりと全身を魔力で包む。

自らの体内に魔法を行使する時に魔方陣は必要ない。ただ魔力を制御するだけでいい。

「はあ、はあ」

ちょっと時間はかかったけど、なんとか全身に身体強化が行き届いたのを感じる。

息を整えて、ようやく立ち上げれる。

彼女はこめかみから血を流していた。その事実申し訳ないという気持ちも生まれたけど、それ以上に嬉しかった。

この人は、限界を超えた魔力を使ってまで私を助けようとしてくれたのだ。

「ありがとう」

感謝の気持ちを

「助けてくれてありがとう」

貴方の優しさに感謝を

確かに魔法は失敗したかもしれない。

それで貴方は悲しそうな顔をしているのだろうけど、精一杯私を助けようとしてくれた優しさは伝わったから。

……それは何物にも変えがたい素晴らしい贈り物だったから。

彼女はまた泣き出した。

「よかった…動けるのね」

「はい、貴方の魔力のおかげです」

「本当は入り口まで、転移させたかったのだけど…」

彼女はまた悲しそうな表情でそう言った。

そこでふと思い出す。そういえば私は一体どうなったのだろうか？

確か結界を発動させて、それから…？

「あの？」

「話したい事は沢山あるけど、もう時間がないの」

彼女は焦っていた。どういう事だろう。

そこでもう一度、状況を整理しようと辺りを見渡す。

広間に中心にある結界の魔方陣に大量の魔力が溜まっていたのを見て、状況を把握する。

そうか…私は……

思わず唇を噛む。母からやめなさいと言われていたけど、感情が高ぶるとついやってしまう。

となると、この人は…

「貴方は守護者…ですか？」

「ええ、私はあなたの次の守護者、エリスⅡRⅡランスターよ」

推測が正しかった事を知る。

…私は……失敗したんだ

「貴方はアリアスⅡRⅡミカルディアね」

「はい……」

「まさか救世主様がこんな子供だなんてね」

エリスさんが苦笑いをしながら言う。

…え？救世主…って私のこと？

思わぬ言葉に驚き、声を上げる

「あのっ！」

「ああ、ごめんもう時間が無いの。入り口まで戻れば私の護衛の騎士たちがいるから、話はそこで彼らと。……私はこれから結界を張るから」

結界を張る。つまり彼女とはもう会うことは無いという事。

私は悲しそうな表情をしていたのだろう。エリスさんは優しい口調で慰めてくれた。

「これは昔から繰り返していたこと。悲しむ必要は無いよ。」

違う…この人は知らない。私をもっと上手くやれていたなら……

「それでも、もし私に同情してくれるなら……一つだけお願いしてもいいかな？」

私は小さく頷く。

「護衛の中にね、私の妹もいるの。リリスっていうんだけど。よか

「つたら仲良くしてあげて。」

「はい、必ず」

「ありがとう。…いい子だね」

彼女そういつてしゃがみこみ、私を優しく抱きしめてくれた……なんだか懐かしい感じがした。

「護衛は私が結界を張るのを確認したら、聖都へ帰ってしまうわ。だからなるべく急いで。私もできるだけ結界の発動を引き伸ばすから」

「はい」

彼女は立ち上がり、右手を出した。

私はそれを握り、せめて最後はと、泣きそうになる表情を押さえつけて笑顔で握手した。

「今までありがとうございます。守護者様」

「これからよろしく願います。守護者様」

別れの挨拶を告げると、私は広間を出て入り口へ向けて走り出した。私は失敗したから……せめて助けてくれた彼女の想いには応えようと、エリスさんの行為を無駄にしないようにと、私は全力で走り出した。

少女　　アリアス「R」ミカルディアの走っていく背中を見つめる。
小さな背中…… あんな小さな子供に世界を託していたのだ、私たちは。

伝承では、アリアスは兵を率いて千を超える魔物を滅ぼしたという
… あんな小さな子が大人でさえ恐れる魔物たちに自ら立ち向かって
いたのだ。

それはどんな恐怖だろう。

いくら強いといっても子供なのだから怖いに決まっている。そんな
事をあの少女はしてきたのだ。

そしてその後は守護者につて…まるで便利な道具の様な使われ方…

……

だからせめて使命を終えた少女には幸せになつてほしい。リリスは
優しい子だからきつと少女を守ってくれる。少々気が強い所が玉に
傷だけ。

そんな想いに苦笑する。リリスとアリアスが仲良くやっている所を
想像して、楽しくなってくる。……そこに自分が居ないことが少し

悲しいけど……

でも私は外から貴方達を見守るから……歴代の守護者がそうしてきたように、私もみんなを見守ろう。

魔方阵の元まで、ゆつくりと歩き出す。

今までの人生を振り返り、そして……最後に出会った救世主様を思い出して……

「幸せにね」

結局、少女が生きていた理由は分からなかった……というより聞かなかった。

だって知らない方が想像できるから……もし私も100年後生きていたら……どうしようかなってね。

その想像は楽しかった。使命という束縛から解放された人生、それは……とても楽しそうだから。

自然と笑顔になるのが分かる。

そして結界は発動した。

第3話 2人の守護者 - 3 (後書き)

二人の会話がちょっと急すぎたかなあと思いつつも、自分の力量不足ゆえ断念。

後で改稿するかも…？

感想批評誤字脱字なんでもどうぞ！

第4話 出会いと再開と

長い通路をひたすら走る。

走る。走る。走る。

その速度は一般的な青年男性よりも多少早い程度。
10歳の少女が走る姿としては異様ですらあった。
なぜなら少女は汗一つかいていないのである。

もつと魔力があれば更にあげられるけど…

無いものねだりしてもしようがない。

あの人の行為を無駄にしないためにも、早く護衛の人と合流しないと。

走れば走るほど魔力が消費していく。

残りの魔力は少ない。長時間は持たないけど……そんな事考えてる場合じゃない。

走っている最中、背後から巨大な魔力の動きが活発になっているのを感じる。

もうすぐ結界が発動するのだろう。

焦る気持ちを抑え、ただ無心に通路を走る。

……そうこうしているうちに通路の先から外の光が入っているのが見える。

……間に合った！

ドゴオオオン！！！！

安堵しかけたその時、外から巨大な爆発音が聞こえてくる。

「……あれは？」

何か巨大なものが爆発した音が聞こえる。

急いで外へ向かうと、そこには通常では考えられないような巨大な生物が空を飛び……暴れていた。

「竜……！？」

数十メートルを超える巨体に、身体を覆う金色の鱗と金色の瞳。鋭い爪と牙、そして巨大な翼を持った竜がそこにはいた。金色に輝いているその姿は、どこか神々しささえ感じられる。

そして地上には6人の男女が荒れ狂う竜の攻撃に必死に耐えていた。そのうちの5人は、魔力の障壁を張る事で必死に竜の接近を防いでいる。

おそらく本分は剣を使った近接戦闘なのだろう。鉄製の鎧を着込み、その腰に剣を帯びている事からも想像がつく。だからだろう……彼らの魔力は弱く、とても竜の攻撃をまともに防げるものではない。

彼ら5人だけであれば一方的な展開になっていたに違いない。

けれど、彼らの中心には1人別の存在がいた。

黒のコートを着た……小柄な女性。

銀色の髪に青い瞳。まだあどけなさが抜けきっていないこの女性は、おそらく14〜5歳くらいだろうか。そんな人が重量感のある黒のコートという、大人の男性が着そうな服を着ている事に違和感を覚える。

彼女は魔力の塊である魔力弾を散発的に撃つ事で、竜を牽制していた。

魔力を火や水といった違う存在に変質させず、ただ魔力の塊を撃っている。

本来魔力は魔方阵を通して効果を発揮する。しかし彼女は、自らの体内で圧縮させた魔力をそのまま体外へ放出している。それは威力は低いけど、魔方阵を構築させる時間が必要ない分速く撃つ事ができる。

もちろんそんな魔力の塊など、竜に対して効くはずもないのだけけれど、数があまりにも多い。

1発2発ではない、その数は数十発にも及び、またそれが続く事で竜の接近を防いでいた。

そして彼女は狙っていたのだ。竜がしびれをきらして大きな一撃を撃とうとする、その瞬間を……

そしてその時はすぐにやってきた。竜が一度大きく羽ばたき距離を取る。そして大きく息を吸いこんだ。

思わずアリアスは叫んでいた。

「危ない！」

竜は炎を吐こうとしている。竜の炎は何千度にも及ぶ超高温、あの障壁では確実に防げず……全滅する。

しかしその時、黒いコートを着た彼女の目の前には幾つもの魔方陣が浮かんでいた。

「呼び出すは氷の世界！！」

そして彼女が叫ぶと、魔方陣からは視界を埋め尽くさんばかりの何百といった氷の刃が竜へと襲い掛かる。

しかしそれとほぼ同時に、竜の口からも巨大な炎が吐かれていた。

それは金色の炎だった

「え！？」

それは、普通の竜ではありえない色の炎だった。

炎は赤色をしている。それは共通の物。

彼らは驚きで目を丸くする。彼女もまた同様に驚愕していたが魔法が弱まることは無い。

……アリアスはそれを見た瞬間、咄嗟に飛び出していた。

残りの魔力を全て使い、魔法を唱える。

「神の守護を！」

魔力障壁……その規模、硬さは彼らの比ではない。

その障壁は、今まさに炎をかき消して真っ直ぐ飛んでいく氷の刃から……竜を守っていた。

「何！？」

「誰だ貴様は！」

彼らは余りの出来事に我を忘れ、アリアスに怒りの感情をぶつけてくる。

魔法を撃った彼女もまた混乱していた。

っ！この娘はなに！？……私の最大魔法を防いだ？竜のブレ

スで力が弱まっただとしても……こんな子供が！？ はっ！ いえ今はそれより竜を……！

混乱して竜から目を離してしまった彼女は再び竜を見る。

すると竜はこちらへ向かって……いや先程の少女のもとへ勢いよく飛んできている。

「え……？」

思いがけない標的の変更に一瞬思考が止める。

……少女は力つきたのか、その場に崩れ落ちていた。

「危ない！」

少女のもとへ走りですが、竜は既に少女のすぐ傍で地面に足を付き、見下ろしている。

「まずい」

魔力は先程の魔法でほとんど失ってしまったけど、まだ魔力弾ぐらいなら……

いざ撃とうとした瞬間

「……………アリー……！！！！！！」

とても高くて可愛い声の 竜の叫び声があたり一面に響いた。

「……………は？」

その場にいた全員が固まった。

第4話 出会いと再開と（後書き）

というわけでアリアスの事を知る竜が登場！

……人ではなく竜なのであらずは嘘ではないですよ、はい。

なんというか書いてたら急に出したくなっちゃたので……ついカッとなって出した。反省も後悔もしていない。

第5話 出会いと再開と - 2

「アリー！大丈夫！？ねえ、アリー！！」

巨大な竜が倒れていてる少女に対して、なんというか……まるで子供が泣いているような声で叫んでいる。

……アリーというのはあの娘の名前なのか……

奇妙な風景……そもそも竜が喋るなんて……

恐怖の存在として大陸中に知れ渡っている存在……竜

その鱗は硬く、中途半端な力では一切傷つけることはできず、またその爪に切り裂けない物は無いと云われている。

一般人はおるか、聖都の騎士団でもまとともにやりあえる人物は片手で数えられる程度。

竜を討伐する場合は最低でも数十人下手したら百人規模の人間が集められる……脅威の存在。

それなのに……あんなうるたえて……

「やっぱりあんた達がアリーを！」

「……っ！」

そんな事を考えていたら、竜はこちらを睨み付けてきた。先程までとは段違いの重圧を感じる。

……え？さっきまでは全力でなかった……の？

こちらの想像を遥かに上回る凶悪な殺意を前に、足がすくむ。

「あんた達がアリーをこんな場所に閉じ込めていたのね！！」

……竜が言っている事は理解できない。けれど反論しようにも場を支配する圧倒的な恐怖の前に口が動かない。

恐怖で身体が動かないなんて……

周りを見渡すと、仲間の騎士達も同じよう身体が竦み、動けない様子……

こんな事は初めての経験だった……

「……許さない！！」

竜の気配が変わった。

……来る！

「……だ……め……」

……けれどそれは小さな声によって阻まれた。

その声は小さいのに……はつきりと聞こえてきた。

「……だ……めだよ……ベルちゃん」

「アリー！」

「人……傷つけちゃ……だめ……」

アリーと呼ばれた少女が苦しそうに咽る。
相当衰弱しているのが遠くからでも伝わってくる。
その様子を見て固まっていた身体が思わず動きだす。

「アリーに触るな……！」

少女に触れようとしたその瞬間、竜が右手で辺りをなぎ払う

「……っ！」

直接当たってはいないのに、その風圧だけで吹き飛ばされそうになる。

……なんて出鱈目な力。

恐怖が再び身体を支配しようとする……が

「……メッ」

少女が優しい口調で竜を怒る。
けれどそれは全く怖くなく……むしろほえましさをさえ感じる……
しかしそれを聞いた竜はビクッと動きが止まる。まるで母親にいた
ずらが見つかって脅える子供の様な仕草で……

……というかメッって……メッって、そんな幼児へするみたいなの……
……なんかとても竜に対する扱いとは思えないんだけど……

「…………でもアリー……」

竜がしゅんとしてる……ちょっと可愛いな……いやそうじゃなくて、
なんなのこの状況……？

そもそもこの少女は一体何なのだろう？

こんな場所に突然現れたと思ったら、私の魔法を防ぐ魔力障壁を生
み出して、極め付けに竜を子供扱いするなんて……

「…………だめ……だよ……ね？」

それにしてもさっきまでの緊迫した様子が嘘のよう……

少女は相当衰弱しているのか、竜は不安そうな表情で見つめている。
その姿はまるで人間そのもので、さっきまで戦っていた竜と同じと
はとも思えない。

「竜よ……取引をしよう」

その時、私の後ろにいた隊長が声をあげる。

「この少女は我々が責任を持って助ける……だからこの場は収めて
くれないか？」

竜がこちらを睨みつけ、悔しそうな表情を見せるが

「もしアリーになにかあったら……その時は分かってるわね」

「ああ」

隊長は竜から目を離さずに

「リリース、彼女を見てやってくれ」

「はい」

私は今度こそ少女の下へ行き、様子を伺う。

少女は力尽きたのかもうまともに声を発する事もできない様子。

外傷が無い所を見て、とりあえず近くの町へ行き医者に見せる事を勧める。

外傷が原因であれば治癒魔術である程度は治せる事ができるけど、そうじゃないのであれば医者に見せる必要がある。

「……竜よ、この少女は我々が保護しようと思っただが？」

竜は悔しそうな表情で睨みつけてくるが、異論を挟む様子は無い。

「……わかった。……だけど私も付いていく」

「さすがにそれは……」

思わず反論してしまう。竜が町まできたら大変な騒ぎになる。

それじゃあ休むどころの話ではなくなってしまうだろう。

竜もそれは分かっているのだろうか、口を挟まず何か考えているようだ。

「姿を変えればいいのだろっ」

「……え？」

瞬間、竜の身体が強烈な光で覆われる。

「なに！？」

あまりのまぶしさに思わず目を閉じてしまっ、それでもなんとかゆっくりと開けると、

そこにはもう一人

「これで問題あるまい」

やたら自信満々な金髪少女がいた……素っ裸で。

第6話 出会いと再開と - 3

……ここはどこだろう？目を覚ますと、そこは知らないベッドの中だった……

身体を動かそうとしても動かす事ができない。身体を長年使っていないかったせいだろう……筋肉が大分落ちている……

しかし幸いにも魔力は回復している。心を落ち着かせて全身に魔力が行き届くよう集中する。

『身体強化』

魔力は完全に回復してる。その事を実感し安堵する。魔力が無いだけで動く事すらできなかったのだから……

そこまで考えて思い出す。聖地での事、エリスさんとの別れ、外であつた戦闘、大規模な氷の魔法を使った彼女……そして金色の竜

「ベルちゃん!!」

思わず飛び上がるように起きると

「うわっ」

なにかが膝にぶつかり、知らない声が聞こえる。

私の横には、椅子に座ったままで上半身を私の膝の上に覆いかぶさるように寝ていた、見知らぬ金髪の娘がそこにはいた。

私と同じくらいの背丈の彼女は目を丸くしたが、すぐに嬉しそうな顔になり顔を近づけてくる。

「アリー！！目が覚めたんだね！！」

「…………え？」

私の事をアリーと呼ぶのはベルちゃんしかない。私の……唯一の友達。

「良かった。3日も目覚めなくて…………心配したんだよ…………」

「…………え？え？」

けれど私の知ってるベルちゃんは竜で、人間じゃない…

「えっと…………どなたですか？」

「え？…………アリー、私の事忘れちゃったの？」

金髪の子はこの世の終わりみたいな絶望的な表情で…………目には涙を浮かべていた。

「やだよ、私のこと忘れちゃだよ！ずっと探してたんだよ！！ずっとずっと…………探してたんだよ。やっと見つかったのに…………こんなのだよ」

その子供のようなしゃべり方が思い出の竜と繋がっていく。

「……えつと……ベルちゃん……なの……？」

「アリーー!!」

勢いよく抱きつかれて、二人してベッドに倒れこむ。

「アリーー！アリーー!!」

「ちょ、ちょっと待って！ベルちゃん!!」

ベルちゃんは興奮した様子で、泣きながら私の胸に顔をうずめてくる。

「失礼する」

その時、ドアが開き、黒のコートをきた女性が入ってきた。

「なにやら話し声が聞こえてきたが、起きた……の……か……」

女性はベッドに目をやると、最後まで話を続ける事ができず、固まっていた。

「し、失礼した」

顔が真っ赤になり、慌てて頭を下げて退出していく。

ベッドの上で抱き合っている二人。

ベルちゃんが興奮して暴れたせいか着衣はすっかり乱れ、お互いの声も荒い。

ナニを想像されたのか分かり顔が真っ赤になる。

「ち、ちがいます、そういうのじゃないですから!」

去っていったドアの方へ思わず叫ぶ。

するとゆっくりと女性が顔を出してくる。

……真っ赤な顔のまま

「……私も一応そういう知識はある。……ただ女同士、それもまさかこんな幼い子が……いや、なんだ、その……邪魔したな」

微妙に言葉をぼかしながら、そう言い残すと再び去ろうとする。

「だ、だから、ちがいますって!誤解です!!そういう趣味はありません!」

誤解され、慌てて引き止める

「べ、ベルちゃん、ちょ、ちょっと離れて!」

「アリー……私の事嫌いになったの?……だから、黙って行っただけ?」

「ちがうから!そうじゃないから」

「じゃあどうして離れてなんていうの!?私が傍にいるのが嫌なんでしょ!!私はずっとアリーと一緒にいたいのに……ずっと寂しかったんだよ!!」

アリーはまるで癪癪を起こした子供のように泣き出した。
私はその声を聞いて冷静になり、落ち着いて話し始める。

「……ごめんね、ベルちゃん。一人は寂しいよね。もうどこにも行かないから……ずっと一緒だよ」

ゆつくりと、頭をなでながら優しい笑顔でそう告げた。

「うん！うん！」

ベルちゃんは泣きながらも、嬉しそうに返事をしてくれた。
その反応に私も嬉しくなる。

「あー、なんだ。私はやはり退出した方がよろしいかな？」

コホンとわざとらしい咳払いをした彼女が若干気まずそうな顔でこちらを見ている。

「え？きゃ！」

慌ててベルちゃんを引き離し彼女の方を向く。

……は、恥ずかしい

おそらく私の顔は真っ赤なんだろうなあと思うと気恥ずかしさから逃げ出したい気分駆られる。

「アリー？どうしたの？熱あるよ？」

……うん、やっぱり真っ赤だよね……

なんとか落ち着いて、彼女と、それと後から騒ぎを聞きつけた隊長さんから話を聞く。

なんでも、倒れた私を近くの町まで連れてきてくれて、宿に寝かせると医者を呼んでくれたらしい。

他の騎士達は無事に結界が張られた事を報告するため、先に聖都へ帰還させたそうだ。

そして医者からは、衰弱が激しく熱もあるのでとりあえず寝かせて体力を回復させる事。

またその後は身体を動かして筋肉を取り戻す必要があるといわれたらしい。

今居る町は聖地から一番近い町でオローネという事を聞いた。……それは私には聞いた事の無い町だったけど、大きな町らしく、窓から外を見ると活気ある町並みが見える。

現状を把握すると、今度は彼女から質問された。

「それで、貴方は何者？何故あんな場所にいたの？それとその竜と知り合いみたいけど？」

おそらくずっと我慢していたのだろう。聞きたいことをここぞとばかりに投げかけてくる。

けれど、それに答える前に確認しなきゃいけない事がある。

「その前に貴方のお名前を聞いてもよろしいですか？」

最初見た時からずっと気になっていた……彼女はとてもよく似ていたのだ。

エリスさんに

しかし、割り込むように隊長と呼ばれた壮年の男性から名乗りだした。

「ああすまない、そういえばまだ名乗ってなかったな。私の名前はライオネル・クレスディア。一応聖都の騎士団長をやっている。まあ正直飾りみたいなもんだがな。」

と、ライオネルさんは笑いながらそう言った。

見た目は怖いおじさんって感じなのに……口調は意外と軽い感じだなんだか拍子抜けする。

そして……肝心の彼女も続いて名乗りだす。

「私の名前はリリス・R・ランスター。王宮騎士を務めている」

その名前を聞き、エリスさんとの“約束”が脳裏に浮かぶ。

「エリスさんの……妹……ですね」

「っ！姉さんを知ってるの!？」

「私はアリアス・R・ミカルディアと言います。……私は前回の

守護者で、エリスさんには聖地で助けて頂きました」

「なっ！？」

「えっ！？」

二人は同時に驚きの声をあげたが、すぐに冷静になり、私は聖地であった事を話し始めた。

……ちなみにベルちゃんは泣きつかれたのか、私にしがみついたまま寝ちゃいました。

第6話 出会いと再開と・3（後書き）

今の所GL要素を入れる予定はありません……多分……きっと……お
そらくは……

第7話 涙

「一つだけいいか？」

全て話終わった後、リリスさんは険しい顔で……エリスさんには聞かれなかった当然の疑問を聞いてきた。

「何故生きている？」

「…………それは……」

「いや、すまない。聞き方が悪かったな、責めている訳じゃないんだ。ただ、聞きたいんだ……姉さんも……例え100年後だとしても、それでも生きてこの世界に戻ってくる可能性があるのか……聞きたいんだ」

嘆願するようなりリスさんの言葉、けれど私は

「それは無いと思います」

私は……残酷ともいえる言葉をはっきりと口にした。

「はつきり言うな」

予想通り返ってきた言葉は咎めるような口調だった。

本当はもう少しほかした方が良かったのだろう……結果がわかるのは100年後。リリスさんはその時にはもう亡くなっているのだから。

……けれど、希望を残すような嘘を言いたくなかったから……私は全て話す事にした。その結果……恨まれる事になったとしても、私はもう黙っている事はできなかったから……

「聖地の結界は守護者の身体を魔方陣、そして血液が魔方の内容を構築する術式になります。これが王家の血でないと結界が発動しない理由です。そして血液からは少しずつですが命力を持っていかれる……けれど、聖地の魔力がある間は命力が無くなった状態でも魔力で命は繋ぎとめられ、結界は張り続けられます。そして100年経つと聖地は新たな魔力を補充するため、少なくなった術者の周囲の魔力を消し、新しい魔力をそこに補充します。しかし命力を失った身体は、一度魔力を消された事で、身体が消滅してしまうのです」

ここまでは二人とも理解しているのだろう。黙って話を聞いている。

「……私はその術式を変えようと思いました」

この言葉に二人の身体が硬直する。結界の術式を変える。それがどんな非常識な事が分かってしているのだろう。何千年も続いた守護者というシステム。それを壊そうというのだ。

「血液を使用しなければ命力を失う事はありません。幸い魔法の発動中は老化する事ありませんから、命力さえ失わなければ死なずに済みます。だから最初の結界発動時のみに血液を使用して、発動後は従来の魔法と同じ魔方陣へと変換、あくまで普通の魔法として

結界を維持させようとしたのですが……失敗してしまいました」

ライオネルさんが当然の疑問を投げってくる。

「おい、それはもし成功していたら……」

「はい。成功すれば私は死なず、永久に結界を張り続ける事が可能でした……結局途中で私の魔方陣は耐え切れず、術式は元に戻ってしまいました……」

私は失敗した事を思い出して、思わず唇を噛んだ。

「そして私の血液はもう術式には成りえません。通常の魔方陣の術式と同じように、一度発動させたら消滅しますから……それと……」

そこで言葉を一度区切り、はっきりと言う。

「それと……私はもう命力がもうあまり残っていないと思います」

「それは！」

「おいおい、そりやまずいんじゃないのか？」

「はい、あと数年……いえ、もしかしたら明日死んでしまってもおかしくない状況です」

自嘲したように言う私にリリスさんは驚きの声をあげる。

命力を正確に測る事はできないけど、普通は100年程度生きれる命力を持っている。

けれどほとんどの人は命力を全て使い切る前に、身体の老化、病気などで死んでいく。

例外としては魔力適正値を超えた魔力の異常行使がある。

私の場合、結界の魔法が途中から通常の術式に戻ったため、全ての命力を使い切る前に100年経ったので生き残る事ができた。けれど、それももうどれくらい残っているか予想は付かない。

「以上が聖地で私が行った事です」

そう言い、2人を見つめる。

2人ともまだ困惑した顔をしていたが、一応納得はしてくれたようだった。

「とりあえず話は分かった……やっぱり姉さんは生きて戻って来れないんだな……」

そう言うリリスさんは、とても悲しそうな表情をしていた。本当にお姉さんの事が好きなのだろう。それが伝わってきて胸が痛くなる。

もうここから先は続ける必要は無い。

私は全て話したのだから……無理に彼女に気づかせる必要は無い。

けれど……私は……

リリスさんに頭を下げた。

「……ごめんなさい」

「え？」

リリスさんは私が謝罪した意味が分からないようだった。
だから私は分かるよう続ける。

「私が……私のせいで……」

弱気になる心を押さえつけ、必死に言葉を紡ぐ。

「……私が失敗したせいで……エリスさんは死んだんです」

そこまで言うのと2人とも私の謝罪の意味が分かったのか、周囲の空気が重くなる。

私が成功していればもう守護者なんて必要なかった……私がずっと結界を張っていられたら……エリスさんは死なずに済んだ。

そこまで考えて……自分の身体が震えてきた。

リリスさんは怒るだろう。あれだけエリスさんの事を想っているのだ……怒らない訳が無い。

いや、怒るなんて生易しい表現ではきつと済まないだろう……

これから起こる事を想像して、今すぐ逃げ出したい気持ちに駆られる。言わなければ良かったとさえ思ってしまうほどに。

けど！けどエリスさんと約束したから……仲良くするって。必ず仲良くするって約束したから！

後ろめたい思いを抱えたまま仲良くなるなんて……そんなのは違うと思ったから……

……逃げちゃいけない。

エリスさんとの約束は果たすために……逃げちゃいけない。

リリスさんは許してくれないだろう……間接的とはいえ自分の姉を殺したような人と仲良くするなんて無理だ。

けど、やるんだ。例え何度殴られても蹴られても、リリスさんに許されるまで……明日死ぬとしても……最後まで逃げちゃいけないだ……

それが……失敗した私の贖罪でもあるのだから。

暫く頭を下げたまましていると、リリスさんが動くのが気配で分かる……殴られるのだろうか……いや……もしかしたら殺されるかもしれない……

リリスさんは私のすぐ前に立っている。私は頭を下げたままだから表情は見えない。

……怖くて見る事ができない。

けど、私は逃げないって決めたから……何をされても私は……！

リリスさんの手が動くのを感じる。私はギュッと両目を閉じた。

その手は、そつと私の後頭部に添えられた。

「え？」

今度は私が困惑する番だった。

「頑張ったんだな」

頭上からリリスさんの優しい声が聞こえてくる。

「…………え？」

「一人で色々考えて、頑張ったんだな」

顔を上げると、リリスさんはそっと私の頬に流れていた涙を拭ってくれた。

「…………わたしは…………」

「もういいんだ、君は頑張った。一人でそんなに背負わなくてもいいんだ」

「…………う…………あ…………」

言葉にならない声が出た。

恨まれると思った。

罵倒されると思った。

何を言われても逃げないようにつて思った。

どんな事をされても耐えなきやいけないつて思った。

だって私のせいだから……

エリスさんが死ぬのは私のせいだから……

「君のせいじゃない」

その言葉に私の胸はいっぱいになった。瞳は涙で溢れていてもう止める事はできなかった……

私のせいでエリスさんは、お姉さんは死ぬのに……それなのに……それなのにこの“姉妹”はどこまでも優しくかった。

「あ……うつ……うああっつ……！！！」

「……ん、アリー？……どうしたの？どこか痛いのか？」

私の涙がベルちゃんに落ちていく。涙で目が覚めたベルちゃんは心配そうに声を掛けてきてくれる。

「……ちがう……あああ」

上手く言葉にならなくて、頭を大きく振った。

そんな私を……エリスさんが優しく包んでくれた。

限界を超えた魔力で私を助けようとしてくれた姉

失敗した私を一切責めずに優しく慰めてくれる妹

この姉妹は本当に優しく……暖かくて……涙が止まらなかった。

第7話 涙（後書き）

なんか色々複雑で分かりにくい結界の設定説明です……ああ文才が欲しい……

第8話 これから

「もう……大丈夫です」

「ん、そうか」

そういつてリリースさんは私を包んでいた手を離す。
離れる間際、軽く頭を撫でてくれたのが嬉しかった。

「さて、とりあえず状況は分かったが……問題はこれからだな」

「聖都へ戻るのではないのですか？」

「そつからだよ、この2人をどうするか決めとかねえとな」

ライオネルさんは難しい顔で悩み始めてしまう……そんな様子にリリースさんは不思議そうに問いかける。

「何を悩む必要があるのです？ 彼女は前守護者です、聖都をあげて迎い入れればよろしいのでは？」

ライオネルさんは、はあ、とため息を吐くと

「お前、聖都がアリアスⅡRⅡミカルディアを何て言ってるのか知ってるよな？」

「勿論です、知らない訳が無いでしょう」

当然です、とリリースさんは胸をはって答えた。

「だったら分かんたろ。聖都からすりや便利な道具になるって事ぐらい。救世主様っていう民衆を煽る政治の道具……それならまだいいが……下手すりや救世主の名前を騙る不届き者つって処刑される可能性だってある」

「……それは」

反論できないのか、リリースさんは俯いて落ち込んでしまった。

ん？救世主って私の事？そういえばエリスさんもそんな事を……

「あ、あのっ！救世主ってなんですか？」

「ん？ああそうか、嬢ちゃんが知ってる訳ねえよな」

話を聞いたら、……頭が痛くなってきた。

今から100年前、結界の存在を疑う数十名の反逆者達が聖地を占拠し、守護者が殺害されるという事件が起きた。事態に気づいた聖都は騎士団は派遣するも時すでに遅く、大陸を守護する結界は壊れてしまう。しかしその後、外から魔物が襲ってくることはなく、民衆は聖都に騙されていたと憤慨し反乱にまで発展してしまった。

それから5年が経ち、聖都と反逆者達による争いも膠着しはじめた頃、ソレらは現れた……

伝説でしか聞いたことのないような竜や、全長数十メートルは超えるのではないかという巨大な獣。それまでも大陸に魔物はいたが、ここまで凶悪な物は見た事がなかった。

人々は魔物を恐れ、反逆者達は聖都へ許しを扱いた。

聖都は当然許すはずは無く、主だったメンバーを全員処刑にしようとした……それを止めたのが、アリアスⅡRⅡミカルディアである。

アリアスは彼らも我らが守護する民衆であると訴えた。

そして騎士団を率いて自ら先頭に立ち、万を超える魔物の集団を殲滅したという。

この事がきっかけでアリアスを英雄視する民衆が増えていった。

更にアリアスは壊れた結界は私の魔力でしか直せないと、周囲の反対を押し切り1人で結界を張りに聖地へ向かった……その後、アリアスを見た者はいないが、無事に結界が張られた事からその後を推測するのは容易かった。

自ら戦いの先頭に立つ勇氣。

反逆者さえも守るべき民衆だという愛情。

そして……死を理解していてもなお世界を守るために結界を張りに行く自己犠牲の精神。

これらの事から、アリアスは救世主とも英雄とも呼ばれ、彼女の残した功績を忘れぬよう聖都の中心にはアリアスⅡRⅡミカルディアの銅像が立っている。

「……………」

話を聞いたアリアスは呆然としていた……

「しかし本人を見るとそんな風には見えねえもんだが……………」

「……確か、アリアスが結界を張りに行くのが20歳になっていた
と思ったのですが……？」

「さすがにこんな小さい嬢ちゃんが救世主ってのは格好つかねえっ
て思ったんじゃないか？」

「しかし……それは……」

「言っな、政治の話だ」

二人はなんだかしんみりとしてしまっている。

「……ハハハ……」

私の口からはもう乾いた笑いしかでなかった……

確かに魔物とは戦いました……1人で……それも命令されて……そ
んな風にかっこよくなかったです。

反逆者さん達は確にかばいました。それは単に人が死ぬのを見た
くなかったからです……

結界は……確かに黙って1人でいきましたけど…………けどそれは
……

救世主とか英雄とか……そんな風に思われるような事はしてないん
です……銅像って……

「……はあ」

思わずがっくりと力なくため息を吐いてしまう。

そんな様子をベルちゃんは首をかしげて可愛らしく見ていた。

「話を戻すけどな、馬鹿正直に聖都へ連れて行かないほうがいいだろう。なにされるか分かったもんじゃねえ。特に今の聖都は……な」

「そうですね……どこか別の町へ……」

落ち込んでいたら何やら話が思わぬ方向に言きそうだったので、慌てて口を挟む。

「あのっ！私はリリースさんと……一緒に……いたいんですけど」

「私と？」

「……はい、あの、エリスさんとも……約束しましたし……」

するとベルちゃんも横から当然といった口調で入ってくる。

「アリーが行くなら、私も一緒に行く」

そんな私たちの突然のお願いに、ライオネルさんは少し悩んだ後、リリースさんへ提案する。

「そうだな……リリース、引き取ってやったらどうだ？嬢ちゃんの正体は隠して2人共孤児として引き取ってやればいい」

「……それは……しかし……」

「ごめんなさい……迷惑ですよね」

確かに、突然こんな事言われても迷惑だよな……

「え、あ、いや、そうじゃない！そうじゃないんだが……」

何だかりリスさんにしては齒切れが悪い。

リスさんは腕を組んで難しい顔をしてる。

「……うゝむ……」

「……ごめんなさい……忘れて下さい」

さすがにこれ以上私の我俣で悩ませるのも申し訳ないし……

「リス、何をそんな悩んでいるんだ？」

「……住む場所ですよ……」

「あゝ……そうだったな……」

「どういことですか？」

話を聞くとリスさんは王宮騎士として城内に住んでいる。
聖都の貴族が住む上層部にはランスター家の屋敷もあるらしいけど、
滅多に帰ることは無いらしい。……つまり、私たちを引き取る場合、
住む場所が無いのでどうするべきか悩んでいたのだった。

「さすがに城内に引き取った子を住まわせる訳にもいかないでしょう?」

「そりゃそうだな……どうしたもんかな」

そこまで聞いてある考えが思い浮かぶ。

「あの……王宮騎士の皆さんは城に住んでいるんですか?」

「ああ、不測の事態にもすぐに対応できるよう城内に住んでいる」

なら、簡単だ

「じゃあ私、王宮騎士になります!」

「「は?」」

何故だろう? いいアイデアだと思ったのに、2人はポカンと呆けたような顔をした。

「あ、えっと、ベルちゃんもいいかな?」

「うん。私はアリーについていくよ」

ベルちゃんが嫌だと言ったらどうしようかと思ったけど、そんな事にならなくてよかった。

躊躇いなく満面の笑顔でついていくとくれたベルちゃんの反応が嬉しかった。

やっぱりみんな一緒の方が楽しいよね。

「そうすればリスさんと一緒にいれますよね？」

私は自分の思い描いた未来が楽しみで、自然と笑顔になっていた。

第8話 これから（後書き）

アリアスのリリス好きっぷりは半端ありません。

第9話 王宮騎士

聖都に存在する騎士団の中でも選ばれた者だけが任命される『聖都王宮騎士』

その数は常に10人程度と少数だが、彼らは全員が無類の強さを誇り、多くの騎士達の目標となっている。

ちなみにリリスは序列10位と現在の王宮騎士の中では一番下だが、13歳という歴代最年少の任命であった。

守護者の妹だからと揶揄される事もしばあったが、その理由としては聖都に3人しかいない魔力ランクAの持ち主だからというのが大きい。

ライオネルは騎士団の団長を務めているが、騎士団は王宮騎士とは別に存在し、その地位は王宮騎士よりも低い……今回の守護者の護衛任務ではライオネルが隊長を務めているが、それはリリスが無理やりくつついてきたためである。

「リリスさんってすごいんですね」

「たまたま魔力があっただけだ」

魔法ランクはA～Hの8段階に分けられる。最低ランクのHは魔力無しを示し、大半の人間はこちらに分類される。

騎士の中でも魔法騎士を名乗る魔法主体の騎士は約100名程度存在するが、7割がDランクであり、残りの3割がCまたはBランクで、Bランクであれば相当優秀であるといえる。

リリスの持つAランクというのも実際は測定不能といった意味で、

同じAランクでも差はあるのだがそれでも一般人からすれば途方も無い魔力量である。

「はあ……それにしても王宮騎士に魔法ランクですが……色々変わったんですね」

なんだか実感無かったけど、今って私のいた時代とは違うんだよね……そんな事をしみじみと思っていたらライオネルさんが疑問の声をあげる。

「昔は無かったのか？」

「はい、そもそも争いがほとんど無かったですから。騎士といっても形だけといいますが、魔法に関してもそんなに研究が進んでいませんでしたよ」

「そうか……争いが激しくなったのは結界が壊れたのがきっかけだったな」

結界が壊れ、反逆者との戦いが勃発。そして外から来た魔物達との戦い。またそういった争いが起こればそこに便乗した賊などが現れても不思議ではない。

しかしそれらは人々の戦う力を成長させた。騎士の数は十倍以上に増え、騎士の中でも役割が細かく分けられるようになった。そして魔法の研究に至っては別次元と言ってもいい進歩を遂げた。

アリアスのいた時代では魔法はあくまでも生活の補助といった意味合いが強く、攻撃魔法などほとんど存在しなかったが、今では攻撃魔法こそが魔法の主体であり、逆に生活に類する魔法は廃れていた。

「騎士になれば当然争いに巻き込まれることになる。魔物相手だけではなく、盗賊や山賊といった人間相手だってある。ましてや王宮騎士ともなれば尚更だ」

「……それは……嫌ですね」

はあ、とリリスさんはため息を吐き

「私としても君にはそんな戦いの場にはいてほしくない」

「……私も、アリーにはもう戦ってほしくない」

それはとても小さな声だったけど、本当に心の底から心配してくれている事が伝わってきた。

「……ベルちゃん。ありがとう」

そうだよね……ベルちゃんはずっと私の事見ててくれてたもんね……

「もう心配させないから」

私はそっとベルちゃんを優しく抱きしめた。

「ん、アリー……」

ベルちゃんの頬がうつすらと赤くなる。

「とはいえどうしたものかな!」

急にリリスさんが大きな声で話し出すから驚いてベルちゃんと離れてしまう。

なんだかリリスさんの顔が少し赤い気がする。

なんだか変な空気になっている所に、ライオネルさんが解決策を出してくれた。

「だったら従者ならどうだ？」

王宮騎士は立場上城内で住んでいるためか、従者を雇っている者も多くいる。

大半が身の回りの事を任せるといった内容が多い……王宮騎士は戦闘技術を磨く事に多くの時間を割いてきたため、一般常識が無く、生活力が無い者が多いのである。

勿論城内には身の回りを世話をしてくれる使用人も存在するのだが、専属ではないため私的な事をお願いしづらく、また任務で聖都を離れる際にも、従者であれば同行させる事ができて便利なのである。

また従者からしても王宮騎士の戦いを間近で見ることができ、暇な時は稽古をつけてくれるのでメリットは少なく無く、従者というよりも将来の王宮騎士になれるよう弟子として教育しているという一面もあるのだ。

そのため本来なら従者にするのは騎士から選ばれるのだが、外の人間を従者にする事は前例がない訳ではない。王宮騎士からすれば優秀ならばそれでいいのだ。

しかしリリスは従者をつけていなかった。まだ若いという事もあり人に教えることなどできないと思っていたのである。

「それでも場合によっては私と共に戦う事になると思うのですが……」

「戦闘技術は無いといって戦いから遠ざけたらいい、嬢ちゃんは何復魔法に長けている専属魔法医みたいな立場にすれば、多少は怪しまれてもそこまで深くは追求してこないだろう」

「……成る程、君は回復魔法は？」

「あ、使えます」

「まあ、あの魔法障壁を見れば最低でも魔法ランクBはあるだろうし……」

魔法ランクを調べるためには特別な測定器が必要で、生まれた子はすぐに調べられる。しかし測定器が無い街も存在し、死ぬまで自分の魔法ランクを知らないままというケースもあるという。最も魔法ランクD以上あれば働く先に困る事はなくなるという事から、ほとんどの人は一度は測定するため、近くの測定器がある街へ行く。

しかしここ、オローネにはその測定器が無いため魔法ランクを調べる事ができない。

そのため、リリスとライオネルはアリアスの力を過小評価していた。言い伝えではアリアスは救世主として魔物と戦ったとあるが、それは政治的に脚色された話なのだろうとふんでいた。目の前にいる少女はどう見ても騎士団を率いて戦える様な感じではないし、戦闘技術に秀でているとは思えない。大方多少周りより魔法ランクが高かった少女を救世主として祭りあげたのだろう　と、しかしそれは間違いなのだが……それに気づくのはまだ先の話であった。

「えっと、ベルちゃんは？」

「ん、私は使えない。人間の魔法が使えないから」

「そうなんだ……」

「そっちは嬢ちゃんを引き取る条件だったといえいい。優秀な魔法使いを引き抜くためだったと王宮騎士が強く言えば特例として許可はおりやすいだろう」

「そうですね、許可はそれでおりるでしょう、とはいえ立場的には私の使用人になってしまいうでしょうが……」

王宮騎士の権限はかなり強い。とはいえ騎士である以上理不尽な要求をする事は難しいので、何の理由も無く孤児2人を引き取る事はできない。なので2人の内、片方に魔法の才能を見出したので従者として育てたい、しかしまるで姉妹のように育ってきた2人を離れ離れにする事は騎士としてできず、やむを得ず2人とも面倒を見ると強くといえば、まあ通らない事は無いと思う。

ベルちゃんの方を見ると、それでいいとこくこく頷いている。

「はい、私もそれで大丈夫です」

「わかった、これからよろしく頼む……アリアス」

「あ……はいっ！リリスさん！」

私は初めて名前を呼んでくれたのが嬉しくて、思わずリリスさんの手を両手で掴んでいた。

「あ、ああ」

そうしたらリリスさんは何故か顔を横に逸らしてしまった。

あれ？耳が真っ赤になってる……？

（リリス、襲うなよ）

（な！！なにを馬鹿な事をいつてるんですか！？）

ライオネルさんが笑いながら、こつちに聞こえないような小さな声でリリスさんになにか話しかけていた。

何故かリリスさんは真っ赤になっていった。

その後はみんなで宿のご飯を食べて、リリスさんはライオネルさんと馬車の調達や移動に必要な物の買出し。ベルちゃんはご飯が足り

なかったみたいで外で食べてくるみたい（元の身体は大人だったから昔よりたくさん食べるんだって。どうやって何を食べるのかは教えてくれませんでした……きっと聞かないほうがいいんでしょう）

そして私は病み上がりというのもあって、宿で寝てるようみんなに言われたんだけど……言われたんだけど……ちよつとぐらい……出てもいいよね？

ここはオローネという私の知らない新しく出来た町。さつきも思ってた事が再び脳裏をよぎる、ここは私の知る世界から約100年も経っているんだ。新しい町、人の暮らしは一体どんな風が変わっているのか興味が沸いていくる。

そもそも私は聖都から出た事があまりない。出ても命令を果たしたらずくに聖都へ帰っていた。

魔力の高かった私は貴重な存在で、何かあったらいけないからと常に護衛という名の監視が付けられていた。

そこから逃げる事も可能だったけど……そうするとお父さんやお母さんが責められるから……私はずっといい子でいた。

けれど遊びたくなかったわけじゃない。むしろ制限されればされるほどその欲求は溜まる一方だった。窓の外から聞こえる楽しそうな声を聞くと、窓から飛び出したい衝動に駆られた……私も外で遊びたかった。お友達を作って、一緒にへとへとになるまで遊びたかった。けれど、そうするとみんなに迷惑がかかるから……ずっと衝動を抑えてきた……私は普通じゃないから……

けど今は監視はいない……もちろん黙って外へ行ったらリスさんやベルちゃんも怒るかもしれないけど、怒られるのは私だけで誰かに迷惑をかける事はない。

そう思っ たらもう欲求を止める事はできなかった。

アリアスはまだ夕方とよぶには少し早い時間、人々の熱気が溢れる町の中へと飛び出していった。

第10話 家族と誓い

ここオローネは聖都へ行き来する人が道中で休むためにと作られた宿から徐々に発展していった町らしい。

そのためか観光客目当ての商売も多く、よくわからないみやげ物を売っている店が数多く見られる。

アリアスがいたのはそんな店の1つだった。

（こ、これは！？）

アリアスがじつと見ていたのは子供向けに作られたであろう手のひらサイズの人形。

そこには救世主アリアス様人形と書いてあった。

（……いやー、は、恥ずかしい）

話では20歳になっていたり、色々誇張されているので最早自分とは別人と理解はしているのだけれども、恥ずかしいものは恥ずかしいのである。

そんな事を考えながらじつと見ていたせいか、店主が声をかけてきた。

「お嬢ちゃん、それが気に入ったのかい？」

店主であろうお爺さんは優しくそんな表情でこちらに声をかけてきた。深いシワから見てそれなりに年をくっているのだろう、その声は孫

に接するような優しいものだった。

「い、いえ。ごめんなさい」

そついい手に持っていた人形を棚に戻す。

「遠慮する事はない。何やら熱心に見ていたようだしね」

「あ、えと、わたしお金持ってなくて……」

どうやら欲しかったのだろうと勘違いされてるみたいだけど、それを否定するのも難しいので別の理由を告げる。

「そつかい、じゃが見るのは自由だから。そんなに縮こまる必要はないぞ」

「は、はい」

とはいうものの、買う意思も無いのに商品をべたべた触るものも失礼だろう。

とりあえず商品は触らず、目で見ただけにしておく。

「お嬢ちゃんはここらへんの子じゃないね？」

「あ、はい。これから聖都へ行く途中で」

「そつかい、すると聖都のお祭り目当てかい？家族と一緒にかの？」

……家族。その言葉に少し胸が痛むが、表情には出さず会話を続ける。

「いえ、家族はいないので……あ、でも引き取ってくれる人がいて、その人と一緒に聖都で暮らすんです」

家族がないと言うと、お爺さんがなんともいえない悲しそうな顔をしたので、慌てて付け加える。

「……その人は優しいかい？」

「はい！とつても！！」

私の返事を聞いてお爺さんは安心したのだろう。さつきまでの悲しい表情が一転、柔らかいものになる。

「なら、その人は新しい家族じゃの」

その言葉を聞いて、一瞬思考が止まる。

家族？……私とベルちゃんとリリースさん。

……新しい……家族。

私は自然と頬が緩むのが分かった。

さつきは家族と聞いて悲しくなった。だってもういなくなってしまったから。

でも今は違う。

新しい家族という言葉聞いて思い浮かんだ

いつも私を心配してくれる優しい優しい金色の竜。

私の罪を受け止め慰め包んでくれた銀色の女性。

そう……私たちは家族になるんだ。

この新しい時代で、守護者でも英雄でも救世主でも化け物でもなく、ただの1人の人間として……新しい家族を作るんだ。

私はその事を気づかせてくれたお爺さんに、この気持ちが届くよう精一杯の笑顔で

「はいっ！新しい家族です！」

「ほっほ、そうかい。仲良くやりなよ」

そういい、お爺さんは笑いながら私の頭を優しく撫でてくれた。

「ところでお祭りってなんですか？」

お爺さんもお客がいなくて暇なのか、店の隅にあった椅子に座ってお話していた。

「ん、知らんのかい？ほれ守護者様が新しくなったじやろう。それを祝うお祭りが聖都であるんじゃないよ」

「はー、成るほど」

「確かお祭りは明後日からじゃったかの、お嬢ちゃんはいつ聖都に？」

「えっと、まだ決めてないんですけど」

「なら急いだほうがいい。聖都をあげての盛大なお祭りになるらしいからの。きっと楽しいじやろう」

お祭り……100年前にもお祭り自体はあったけど行った事は無かった。

聖都へ行く楽しみが1つ増えて、気持ちが浮かてくる。

「それにこのお祭りは、ほれ、さっきまでお嬢ちゃんが見ていた人形があるじやろ。救世主アリアス様。これまで守護者を務められたアリアス様に対する感謝のお祭りでもあるんじゃないよ」

「……え？」

さっきまでの浮かれてた気持ちが一気に沈む……顔が強張るのが分かる……

(…………それはやめてほしい)

お祭りは楽しみだけど、そのお祭りの目的の半分は私のため……恥ずかしいというか申し訳ないというか……なんともいえない気持ちになる。

しかしお爺さんは気づいていないようで楽しそうに話を続ける。

「お嬢ちゃんはある実感ないかもしれんがのう、わしらの世代はよく親に言われたもんじゃよ。アリアス様がいなければこの大陸は滅んでいた。いまわしらが生きているのはアリアス様のお陰だとの。アリアス様は救世主で、英雄じゃ。感謝の気持ちを忘れてはならない。人によっては天使さまだなんて言ったりもしたもんだ」

そうお爺さんは笑いながら、まるで御伽噺の英雄を信じる無邪気な子供のように話していた。

「……ははは」

けれど私はなんだかもう乾いた笑いしか出ない。正直これ以上話を聞くのは精神的に限界です。

「え、えっと、そろそろ私いきますね。」

「ん、そうか。すまん。こんな爺の話に長々と付き合ってもらって」

「いえ、楽しかったですから」

それは本当だ。お祭りの事も聞けたし……最後はちょっと疲れたけど。

「ほれ、長話に付き合ってもらったお礼じゃ」

そついいお爺さんはさっきまで私が見ていた救世主アリアス様人形を手渡してきた。

「…………え？」

多分嫌そうな顔をしたんだろう、けれどお爺さんはそれを遠慮と受け取ったのか強引に渡してきた。

「あ、ありがとうございます」

お礼を言う私の顔は確実に強張っていた。

「さて、ここらでいいだろう」

私と隊長が宿を出た後、あのベルと呼ばれた竜が話をしたいと言ってきた。

「ああ」

宿から少し離れた所にあったベンチに3人で座る。

「それで話つてのは…………嬢ちゃんの事なんだろうな」

「当然だ」

「それは、アリアスには聞かせたくない話なのか？」

こくりと金色の少女がうなづく。その顔つきはさつきまでアリアス
といた少女とはまるで別人のような鋭いものだった。

「しっかしさつきも思ったが、嬢ちゃんがいる時とはまるで別人だ
な」

隊長が私と同じ疑問を投げる。

少女は顔を赤くしながら、慌てて答えてきた。

「うつうつるさい、アリーといるとだな。その……なんというか……
子供に戻ってしまうんだ……」

その慌てた反応が可愛くて思わず頬が緩む。

しかし、見れば見るほどあの殺気を持つ竜と同じとは思えない。

「そうか、まあいいや。そんで話つてのは、あー……その前にベル
でいいのか？」

「ああ、かまわん」

再び少女……いやベルが真剣な顔になり、こちらを睨みつけるよう
な眼差しで見てくる。

その強い眼差しに思わず身体に緊張が走る。

「これからアリーは貴様と住むことになるのだろっ」

「あ、ああ」

「もしか反対なのだろうか？先程は賛成してくれたと思ったが……？」

「反対……なのか？」

「いや、アリーが決めた事だ。反対する気はない」

「では、その……ベル、の使用人という立場が気に入らん……とか？」

「ベルと名前を呼ぶのに慣れず、一瞬口ごもるが向こうに気にした様子は無く、話を続けてくる。」

「いや、そうした方がいいのであれば従おう。とはいってもそのような経験は無いからな。仕事ぶりに期待してもらっては困るが……」

「それはこちらも承知している。あくまで体裁だから心配する必要は無い」

「というか竜が使用人という職業を知っていた方が驚きなのだが……今はそこは重要ではないので聞かないことにする。話の要点が見えず、黙る事でベルに話の先を促す。」

「数日ではあるがお前達の事は観察していた。それでまあ、多少は信頼できる人間なのだと思う。アリーへの対応も悪くは無い」

「竜のその言葉に再び驚く。この竜は人間を信頼すると言ったのだ。確かにアリアスに対しては異常なほどの執着をみせていたが、その

他の人間に対してもその様な事を思うとは……本来ならば凶悪で人間の最大の敵であるともいえる竜が……人の言葉を喋るなど色々規格外ではあったが、これには改めて驚かされた。

「だがまだ全ては分からない。数日でどのような人間が分かるほど私は人を知らない。だから誓え。これから先、アリーを悲しませない」と

ああ、この竜は本当にアリアスが大切なのだろう……全てはアリアスのために思い行動している。
そこには人間の敵である凶悪な竜の姿はない。

目の前にいるのはただの優しい“人間”だ

だから私の返事は決まっていた。

「王宮騎士リリス」R「ランスター、アリアス」R「ミカルディアを悲しませず、この命尽きるまで守る事を我が魂にかけ誓おう」

「俺と一緒に住むわけじゃないが、関わっちゃったからな。これから先なにかと接することもあるだろう。だから誓うぜ、ライオネル」
「クレスディア、アリアス」R「ミカルディアを泣かせる真似はしないと我が剣にかけ誓おう」

私たちの言葉を聞いて満足したのか、ベルは先程までは違い柔らかな笑みを浮かべた。

「よろしく頼む、リリス、ライオネル」

だがその笑みは一瞬だけだった。

柔らかい顔は悪辣な表情に変わり

「その誓い破りし時、聖都は滅ぶと思え」

その声は冗談ではなく、本気の声だった。

第11話 迷子と盗人

「そろそろ帰ろうかな」

お爺さんと長話をしたせいか、気づけば日は落ち始め、民家からは美味しそうな夕ご飯の匂いが漂っている。

（お腹もすいてきたし。うん、宿に戻ろう。あんまり遅くなるとみんなに怒られそうだしね）

そう決めて、宿に向かって歩き始める。
ただし来た道とは別の道で……

（方角は分かってるし、大丈夫でしょ）

湧き上がる好奇心は抑えきれず、色んなものを見て周りつとちよつとだけ遠回りして帰る事にする。

数十分後

（ま、迷った……）

ふらふらと表通りを歩いていたら、いつの間にやら裏通りに来てしまった。

なんだか怪しげな店が多く、どんな店なのか外から見てもよくわか

らない。

興味をそそられ、近くにあったやたら派手な感じのする店を横目でちらつと確認する。

（ちょっと、ちょっと覗くぐらいなら問題ないよね）

ふらふらと誘われるようにお店の中に入る。

……そしてすぐに出てきた。

うん、問題あったね……

なんだかやけに露出したお姉さんが……いや……うん……その……ね……わ、忘れよう。

その他の店もなんだが怖い感じのする人が多い気がする……じろじろと周りから見られてるし……

（う。なんだかやな空気……）

さっきの光景を忘れるためにも早く表通りに戻ろう。
そう思い、振り返ると

「待て！クソガキっ！！」

「え？」

曲がり角から飛び出してきた、見知らぬ男の子とぶつかってしまった。

「きゃー！」

「うおっ！」

男の子はかなりの勢いだったのか、衝撃でお互いがもつれ込むように倒れこんでしまう。

「な、なに？」

「くそっ、邪魔だ！」

「……ご、ごめんなさい」

男の子は立ち上がりながら悪態をついてきた。そのあまりの剣幕に思わず謝ってしまうが

（あ、あれ？私が悪いの？）

確かにぼーっとしていた私も悪いかもしれないけど、どっちかというつぶつかってきた男の子の方が悪いと思う。

「あ のっ！」

文句を言おうと声をかけるが、男の子はもうすでに走り去っていった後だった。

「な、なんなの？」

「嬢ちゃん、さっきのガキがどっち行っただか分かるか？」

目を白黒させていると、後ろから見知らぬ強面の男性が声をかけてきた。

その人相に少し脅えながらも、男の子が行った方向を指差して告げる。

「え、えつとあっちに行きましたけど……」
「そうかい、ありがとよ。　おいお前ら！ガキは向こうだ。必ず捕まえるぞ！！」

周囲から複数の男性の返事が飛ぶ。

「あ、あの男の子何かしたんですか？」

「盗みだ」

「え？」

「うちの店から金を盗みやがったんだよ。　ったく、見つけたらぶっ殺してやる」

(……あんな子供が盗みなんて)

「あのガキには以前から何度かやられててな、今日こそは捕まえてやる」

周りにいた他の男性も被害者なのだろう。

口調は荒く、その血走った目からは本当に殺してしまいそうなほど強い怒りが込められていた。

「つつわけだ、もし見つけたら教えてくれ」

そっぴい残し男性達は男の子の後を追っていった。
しかし正直信じられなかった。

一瞬しか見えなかったけど、おそらくは私と同じか年下の子供がそんな盗みをするなんて。

(……なんでだろう?)

きつと何か特別な理由があるのだろう、気になったアリアスは男の子の後を追いかけてみることにした。

（それに……あの様子だと本当に殺されちゃうかもしれないし……）

アリアスは身体強化を強め、成人男性の数倍は速い速度で走っていた。

周囲にいた人たちは一瞬奇異の目でこちらを見るが、すぐに走り去るためそれほど注目はされなかったが。

（多分こっちだと思うんだけど……）

途中追いかけていた人たちも見かけたが、すでに追い越していた。

（うーん、こっちで合ってるのかなあ？）

段々不安になってくる。土地勘が無いので、真っ直ぐ走れているか不安になる。

そもそも真っ直ぐ走れていたとしても、男の子がどこかで曲がっていたら見つけることはできない。

そこまで考えて、ふと別の手段が思い浮かぶ。

「ん、試してみようかな」

立ち止まり深呼吸して集中、魔方阵を思い浮かべる。

イメージするのはよく使用していた得意魔法。

見ることはできないが、いま背中に魔方阵が浮かび上がった事を肌で感じとる。

「浮かび上がるは白き意思」

その言葉に意味は無い。

けれど魔方阵が崩れないよう、魔法の効果をイメージした言葉を使うのが一般的とされている。

そして幾度となく唱えてきた力ある魔法の言葉は、違和感なく背中の魔方阵と融合して形を作る。

それは白い2対の翼だった。

（うん、問題無しと）

勢いよく翼をはためかせて飛び上がる。

そして地上からは豆粒程度にしか見えないほど上空まで行き、その場で静止する。

空を飛ぶのは好きだった。

風を感じて飛んでいる間は嫌な事を忘れられたから……

なんだか懐かしいような悲しいような……複雑な気分になる心を落ち着かせ、やるべき事を思い出して地上を見る。

勿論このままではまともに見えるわけがないが、そこは身体強化の力を目に集中させる事で解決する。

「見つかるかなあ……」

とはいっても物体が透けて見えるわけではないので、ちょっと物陰に入られたらもう分からない。

（まあ物は試しっというしね）

そう自分の言い聞かせ、地上の様子を探る。

（うう、全然わかんないよ）

さっきまで走っていた町中を見渡しても、判別が難しい。
上空からだほとんど人の頭しか見えないのだ。

（失敗だったなあ……）

これは元々魔物を探す時に使用していた方法だった。
しかし人間相手では上手く行かなかった事を思い知り、地上に降りようとする。

（あれ？）

町の周囲には外壁がある、それほど大きなものではないが、それでも道具を使わずに登れるような高さではない。
にも関わらず外壁の上に立っている人が見えた。

（あの子……かな）

一瞬した見ていなかったのであんまり自信はないが、なんとなく雰囲気がつかった男の子のように見える。

（間違つてたらその時はその時）

とりあえず確認しようと外壁へ飛んでいく。

しかしその人は外壁の上から町の外へと飛び降りていった。

「え、うそっ！」

数メートルはある高さから飛び降りて平気だとは思えない。

悲惨な光景が思い浮かび、慌てて現場へ向かう。

そこには見るも無残な光景が……無かった。

男の子は平然と地上を歩いていたのだ。

（あ、あれっ！？）

理由は分からないけど背後から見た感じ、とりあえず怪我はないようだ。

驚かせないよう地上に降りてから声をかける。

「あのー、すいませーん！」

男の子は一瞬ビクツとしたが、こちらを振り返ると一転安堵した表情を浮かべた。

「あいつら……じゃないな……？」

「あー、えっと、その」

声をかけてみたはいいが、なんて切り出したらいいか分からず口ごもってしまう。

「なんだよ、用があるんじゃないかねえのか？」

「あのですね、お金……盗みました？」

……結局ストレートに聞いてしまった。

自分の会話能力の無さにちよつと自己嫌悪をしたのも束の間、男の子の気配が変わったのを感じて緊張する。

男の子は一瞬驚いた表情をしたが、すぐにこちらを睨みつけてきたのだ。

「なんだ、あいつらに頼まれたのか？」

「あー、はい。そうですね。頼まれたといえば頼まれました」

追いかけてた人からは見つけたら教えてくれと頼まれていた。

とはいえ、追いかけてきたのはあくまでもこんな事をする理由を知りたかったからなのだが。

「……そうか」

男の子は一言そう呟くと、魔方陣を展開させてきた。

「風よ」

「え、ちよつ、ちよつとまって！」

魔方陣から強烈な風が吹いてくる。身体を前かがみにして吹き飛ばされそうになる身体をしつかりと抑え付ける、しかし風は弱まる事無くまともに動く事ができない。攻撃性はほとんど無いが相手の足止めする簡単な魔法だ。

そしてこちらが動けない事を確認した男の子は背中を向け、走り去ろうとしていた。

「ちょっと……待っててばっ!!」

同じく風の魔法を正面からぶつけて威力を相殺する。

……はずがちょっぴり強かったらしい。

男の子がまるで紙くずのように吹き飛んで行くのが見えた。

「……」

とりあえず吹き飛んでいった所にいつてみる。

「あ、あれ?……まずい……かな?」

……まるで紙のように空を舞った男の子は無残な姿で気絶していた。

第11話 迷子と盗人（後書き）

そんなわけで新キャラの少年登場！

本格的に話に参入するかは未定ですが（おい）

アリアスが入った店の内容のご想像にお任せします。

第12話 戦う事 守る事

「……っ！」

「あ、気がつきました？」

あの後怪我は治療したが目覚める様子が無く、とりあえず邪魔にならないよう街道の脇に移動させようとした所で男の子の目が開いた。

「……お前は？」

「あ、あはは……ごめんなさい！」

とりあえず笑ってごまかそうとしたけど、場の重い空気に耐え切れずに頭を下げる。

「えーと、ちょっと加減間違っちゃって……その」

「……捕まえないのか？」

男の子は短い黒髪に黒い瞳で、男の子にしては可愛いといった言葉がよく似合う顔つきだった。けれどその可愛い顔は今、敵対心むき出しで、瞳は鋭くこちらを睨み付けていた。

「いえ、私はその、……なんで盗んだりしたのか聞きたくて……」

「は？」

「ですから、理由を知りたかったんです」

「そんなもん聞いてどうすんだよ？」

「それは……聞いてから決めます」

そこまで言うと、男の子は呆れた顔でため息を吐いた。

「お前どこのお嬢様だよ。金がほしいのに理由なんか要るのか？」

「で、でもそんな人の物を盗んでまで……」

「はっ！馬鹿かてめえは、世の中にはな、盗みでもしなきゃ生きていけない奴なんかごまんというんだ」

「……そんな」

「つーか盗むだけじゃねえ、暴力、詐欺、殺し。そんなもんちよつと裏道覗けばいくらでも見れるぜ。どうしてそんな事するかって、そうしなきゃ生きていけねえからだよ。お前に見たいな世間知らずのお嬢様には毎日の食べる物にすら困る生活なんて想像もできねえだろ？」

言い返したいけど、何も言えなかった。

……自分と同じくらいの子供の言葉、けれどそこには苦勞してきたであろう重みがあつて……怖かった……

私は何も知らない

「分かるか？分かんねえよな？お前みたいなお嬢様には分からん世界だし、分かる必要も無い。理解したら、さっさとママの所に帰るな」

男の子はそこまで言って、話は終わりだと言わんばかりに立ち去るうとする。

「まっ」

待って下さい　そう言おうとして、けれどその言葉は悲鳴によってかき消された。

「ぎゃあああああああああ！……」

悲鳴は空から聞こえてきた……声があった方向を見上げると人が降ってくる。

突然の事態に頭が追いつかず、その人はあっさりと地面に叩きつけられた……

そうとう遠くから吹き飛ばされたのだろう……頭から地面に落下して辺りに血を撒き散らしていた……確認するまでも無く……即死だった。

「な、なに!？」

「そんな……ワイバーンの群れだ!！」

男の子は呆然と立ちつくしている。

その視線の先にはまだ距離はあるが、確かにワイバーンが群れをなしている……

そしてその進路は真っ直ぐこちらへ……いや町へ向かっていた。

男の子は焦りながらも元々向かっていた方向に走り出そうとする。

……それはワイバーンの群れへと近づいていく方向

「姉ちゃん!！」

「ちょ、ちょっと待って危ないよ!！」

自らワイバーンの所へ行こうとするのを止めようと腕を掴むと、思いつき振り払われた。

そして男の子はすごい剣幕で怒鳴りつけてくる。

「うるさい!!向こうには姉ちゃんがいるんだ!！」

「え?」

「向こうの森に家があるんだよ!！」

家族が心配なのだろう……そこにはさっきまで怖いと思った男の子の姿は消え、ただの家族を心配する子供になっていた。

「……じゃあ一緒に行く」

「……は？」

この男の子は私の知らない世界で生きてきたのかもしれない……でも知り合った以上、危ない場所へ行こうとするのを放っておくこともできない。

「1人じゃ危ないよ」

「ば、馬鹿じゃねえのか？お前こそ危ないから町に帰れ！」

そうこうしている間にも、ワイバーンはこっちに向かってきている。よく考えれば森の中だったら上空からは見つけにくいし、気づかない可能性もある……でもそう説明した所でこの男の子は止まらな

いだろう。

「私も魔法使えるから……さっき見たでしょ？だから大丈夫」

そう笑って言う。

よく見ると多少引きつっていたかもしれない

だって本当は……怖いから……

「ちっ！ついてこれなくても置いてくからな！」

男の子はそう言って全力で走り出したので、私もそれについていく。身体強化を使っているのだろう、想像よりも速かったけどついてい

くのに問題は無かった。

そして森に入っただけすぐにその走りは1人の女性の言葉で止められた。

「カイ！」

「姉ちゃん！」

その女性は長い黒髪をなびかせ、勢いよく男の子を抱きしめた。女性にしては身長が高く、抱きしめられた男の子はすっぽりと胸の中に収まってしまった。

「姉ちゃん、身体は？」

「少しなら問題ないわ……早く町へ避難しましょう」

もうすぐワイバーンが頭上を通る。

今は木の陰になって見つからないが、いつ見つかったもおかしくない。

「でも……今出て行くのは危険じゃないですか？」

今は森の中だから、見つからない。

けれど町へ行くという事は、森を出なければいけないが、そうしたら空から丸見えになってしまう。

その声で初めてこちらの存在に気づいたのか、女性はこちらを見つめてきた。

「貴方は？」

「あ、えっと、私は」

「と、友達だよ！」

「ほえ？」

予想外な言葉に思わず間抜けな声出してしまふ。
すると男の子は目で話を合わせると訴えかけてきた。

「あー、はい。そうなんです。カイ君の友達で、えーと、アリーッ
て言います」

右手に持っていたアリアス人形がちらつと目に入り、本名はまずい
気がしたのでとっさに偽名………というか愛称を言う。
女性は私の前まで来ると視線が合うように少し背を屈めた。

「初めまして、私はマリーツァ。カイの事よろしくね？」

「はい、マリーツァさん」

マリーツァさんに笑顔で自己紹介してきた。後半の言葉は疑問系で
何やら意味深だったけど、気にしない事にする。

「姉ちゃん、早く逃げないと」

横からカイ君の切羽詰った声を聞き、状況を思い出す。

「そうね、早く町へ」

「でも、今出ると空から丸見えですよ」

そう、だったらここで隠れていたほうが……

「大丈夫、私が時間を稼ぐから、2人は町で応援を呼んできて」

……え？

「ここで隠れる事もできるけど……そうすると今度は町が危ないわ。町にワイバーンの群れが着く前に倒さないと被害が出てしまうの。だからね、私が時間を稼いでる間に衛兵を呼んできて頂戴」

……この人は……私は自分の事しか考えられなかったのに……

「なに言ってるんだよ姉ちゃん！」

「カイは私の強さ知ってるでしょ？勝つ事は難しいけど時間を稼ぐくらいならできるわ」

「姉ちゃんは身体が！そ、それにあんな町の連中なんて」

「カイ……ダメよ、それ以上先を言ったら……町の人悪気があつたわけじゃないの。仕方ない事だったのよ」

……マリーツアさんは町の事まで考えてる……このまま隠れていた
ら町は襲われる……ちよつと考えればすぐに分かる事……けど私は
……町には“新しい家族”がいるのに……自分の事しか考えられな
かった……

「わ……わた」

これじゃダメだね……

「わたし……が……」

これじゃあ家族なんて呼べないよ

「わたしがっ！」

ずっと怖かった……魔物じゃなく、戦いでもなく、ただ命を刈り取るという行為が……だって人間と魔物、違いはあっても同じ命を持つていたから。それにベルちゃんに会ってからはその違いもよく分からなくなってしまった。

ベルちゃんは魔物で竜だけど友達だから。

ベルちゃんと話して魔物にも家族がいるって事を知ったから。

理性の無い残虐なだけの存在じゃないって事を知ったから。

私は魔物を殺すことをためらうようになっていった……

魔物達だって家族を作って、友人を作って……人間と変わらない。魔物は人間を殺すって言うけど、人間だってお互い殺しあう……

……そんな光景をずっと見てきた。

人間と変わらない生き物を殺してしまう自分……それはなんて化物なんだろって自分をずっと責めてきた。もう殺したくなんて無かった。

だから……だからさっきも逃げた、本当なら倒せるくせに……殺せるくせにただ逃げる提案だけをしてた。

そうしたらどうなるかちょっと考えれば分かるのに……自分の事しか考えずにずっと逃げてた。

でも……それじゃダメなんだね……守りたい人がいるなら……ただ隠れて逃げるだけじゃダメなんだね。

私がやらなくても誰かが戦う事に変わりはない……目の前にはマリ
ーツアさんが、町にはベルちゃん、リリスさん、ライオネルさん……
……きっと誰かが戦って……誰かが傷つく……その誰かに嫌な事を押し
付けて……自分だけ逃げるようじゃみんなと一緒にいられない……
……だから！

「私がワイバーンを倒します。2人は町に避難して下さい」

誰かじゃなくて私がやるんだ！嫌な事も辛い事も苦しい事も悲しい
事も……逃げちゃダメなんだ。

第13話 強さ

「2人は避難して下さい」

「ちょ、ちよつと待って！無理よ」

「馬鹿かてめえは！？あんな数のワイバーン……無理に決まってる！」

この人たちは心配してくれる……

けど、それは私の力を知らないから……だから少しだけ魔力を外に流す。

それは力が無い人にも分かるくらい圧倒的な力。

「……え」

「嘘だろ！？」

その反応に思わず苦笑してしまう やっぱり私の力は化け物なの
だという事を再認識してしまったから。

さっきまでの高ぶっていた感情が冷えていくのが分かる。
けれどやるべき事に変わりは無い。

その決意は揺らがない。

「応援も必要ありません、1人でいきます」

「でも……危険だわ」

「……私の力は分かりましたよね？危険はありませんよ」

「貴方の魔力が高いのは分かったわ……でも戦いはそれだけじゃない、経験の無い子供じゃあ何があるか分からないのよ！」

経験ならあります

「大丈夫です」

私はずっと

「ずっと……独りで戦ってましたから」

空を見上げる。

そこに見えるのはワイバーンの群れ……そして過去の記憶、命令のままに虐殺してきた記憶。

身体が震えるのがわかる……また昔のように戻ってしまう恐怖……でも……私は決めたから。

「カイ君……これ預かってもらえるかな？」

そっくりカイ君に人形を渡す。

今の私は“アリー”……命令されるままに戦っていたアリアスではなく、ただの1人のアリーとして……守るために戦おう。

過去の恐怖を振り切って、今を守ろう……新しい時代に新しい自分に生まれ変わるために。

「浮かび上がるは白き意思」

「じゃあ、行つてきます」

「待つて！」

「お姉さんはカイ君を守ってあげて下さい」

高く高く飛び上がる。地上では2人がまだ何か言っているようだけど、もう聞こえない。

眼前にはワイバーンの群れ、おそらく30体程度だろう数。その1体でさえ、アリアスの10倍以上の巨体を誇る。

それが30体……傍から見れば絶望的な状況にみえるだろう。

「ごめんね」

けれど、アリアスは謝っていた。

「あなた達も、何か理由があつてここに来たんだよね……」

彼らはこちらを敵と認識したのだろう。

近くにいた1体が勢いよく飛翔し、その巨大な爪を振るう。

「でもね……」

しかしその爪は見えない壁に阻まれる。

彼らはその壁を脅威に思つたのか、数体が同時に炎を吐き出す。

人間が我らの炎に耐えられるわけが無い。

そう思つたのかはさだかではないが、彼らは着弾点に煙が立ち上つた時点で生死を確認せずに先へ急ごうとする。

しかし、その身体がアリアスより前に進むことはなかった。

アリアスを通り過ぎようとした4体の身体は真横から真つ二つに割れ、赤い血を撒き散らしながら地上へ落ちていく。

「……あなた達を町へ入れる訳にはいかないの」

アリアスはいわゆる一般的な攻撃魔法、炎や氷で攻撃する魔法を知らない。

例えば単純に火を起こすための魔法なら使えるが、それを対象物に飛ばす真似ができないのだ。

だからアリアスは体内の魔力を刃の様にして相手を切っていた。

それは普通の魔法使いが使用しても肌が少し裂ける程度の威力しかないだろう。

魔力そのものが現実の物体に与える影響は微々たる物。だからこそ魔法使いは炎などの影響力が強い物に魔力を変質させて攻撃する。

アリアスがしているのは果てしなく魔力効率が悪い攻撃……しかしそれもアリアスの膨大な魔力にかかれば強大な力となる。

なにしろ魔力そのものであれば、変質　魔方陣を使用することなく攻撃できる。その速度は簡単に防げるものではない。

「……ごめんね」

飛び散ったワイバーンの血がアリアスの頬にべったりとついた。

10歳の少女にすればそれはとても不快な鉄の臭いがするものだろう。

けれどアリアスはそれを拭う事無く、言葉を紡いでいく。

「お願い……引き返して……」

守る決意はした。それでも殺したくはなかった。

だからアリアスは言葉を紡ぐ。それは決して届かない言葉。それでもアリアスは言葉を止めなかった。

「お願い……」

しかし彼らは止まらなかった。群れはアリアス1人を強大な敵と識

別して、集団で襲ってくる。

一点からではなく周囲に散らばり前後左右から炎を吐き、また鋭い爪を振るおうとするものもいた。

「……ごめん……ね」

しかしその攻撃が形を成す事は無かった。
全てのワイバーンは地上へ落ちていく。

……赤い血を撒き散らしながら。

彼らは認識すらできなかつただろう……自分達が殺されたことに。

そしてアリアスは大量の返り血を浴びていた。聖地の時から着ていた真っ白だったワンピースにむき出しの手足。全てが深紅に染められている。しかしただ1つ、魔力で作り上げた翼だけは異様なほど白いままだった。

（……どうして……どうして私は……）

こんなにも……こんなにも“弱い”のだろう……

アリアスはただ虚空を見ていた。その虚ろな目がどこに向いているのか本人にも分からない。

（決めたのに……自分で決めたのにっ！）

心が張り裂けそうだった。壊れそうだった。

守ると決めたのは自分、戦う事を決めたのも自分、殺したのも……自分。

命令されてではなく自分で決めた事……けれどその胸中は後悔で一杯だった。

（やっぱり……嫌だよ……殺したく……ないよ）

地上へ落ちていくワイバーンの姿が脳裏に浮かぶ……真つ二つに割れ、体内の臓器を撒き散らしながら無残に落ちていく姿。それらは全て自分で決め、自分がやった事……

……誰のせいにもできない。それがなによりも辛かった。

「……リスさん」

呟いたのは優しい人の名前……あの人が今の私を見たらどう思うだろうか……血まみれの私を見て怖がってしまわないだろうか……他の人のように……

「……嫌だよ」

リスさんにまで避けられたら……きつと……壊れてしまう……でも会いたかった、そんな嫌な想像を今すぐ拭い去ってほしかったから。

抱きしめてほしい……宿の時みたいに包んでほしい……弱い私を……守ってほしい。

「……助けて」

その呟きは誰に聞こえること無く、虚空にひっそりと消えていった

……

第14話 その姿

「すげえ！」

「……カイ……あの子はなんなの？」

「え？」

周囲には空から落ちてきたワイバーンの死骸が散乱していた。それらは全て上空にいる少女がやったもの。弟とさほど年の変わらない少女が……これを？

「……ありえない……」

まさに一瞬の出来事だった、ほんの一瞬であれほどいたワイバーンが全滅していた。

「……あれは……人間……なの？」

そんな事ができる人間なんて聞いたこともない。私とて、騎士団に所属していた人間だ。王宮騎士の戦いも間近で見たこともある。それでも、あんな馬鹿げた戦いは見たことも聞いたことも無い。

「……カイ、あの子は一体なんなの？」

「え、えっと、実は俺も会ったばかりで……」

「……そう」

見た目は少女かもしれない……けれどその中身は得体が知れない。恐らく……いや間違はなくアレは王宮騎士の誰よりも強い。

それは聖都で最強だということ……それも比較しようがないほど突

き抜けている。

魔力の刃でワイバーンを切り裂いた。そんな話をして誰も信用しないだろう。

熱でもあるのかと一笑されて終わりだ。

けどそれをあの子はやってみせたのだ。何の気負いも無く、ごく自然に……それをやって見せた

例え王宮騎士が束になってもあの子には勝てないのではないか？

もしあの子が聖都に牙を向いたら、聖都は崩壊するのではないか？

それは……本当に人間に出来ることなの？

そんな不吉な事を考えていたら少女がゆっくりと降りてきた。

何故かその顔は真っ青だが、今はそれを気にしている場合ではない。

「貴方は何者なの？」

「……え？」

少女は考え事でもしていたのか、こちらの問いに対する反応が鈍かった。

こちらを向いた少女の顔はまだあどけない幼さが残っているが、その全身は血で真っ赤に染まっている。

その奇妙なアンバランスさが嫌に不気味に思えた。

思わずカイを背中に庇い脳裏に浮かんだ疑惑を口に出す。

「……貴方は……人間なの？」

「……っ！」

それは少女からすれば失礼な質問だろう。

その外面はどう見ても人間にしか見えない。

……けれど、その中身を見てしまった後では……何か邪悪な物のよう
うで……

「……わ、わたし……」

少女は震えていた……その弱弱い姿を見て胸が痛んだ。
先程のあまりに失礼な質問は謝罪したほうがいいのではないかと思
い始めたとき、周囲から声が聞こえた。

「こっちだー！ー！魔物の群れはこっちで見えたぞ！ー」

町の衛兵達がワイバーンの群れに気づいたのだろっ、集団でこちら
にやってくるのが見える。

彼らの方へ目を向けようと、少女から目を離れた瞬間、少女は人が
来た反対方向へと勢いよく飛び去ってしまった。

「あ、まって！」

声をかけるが、少女は振り向きもしない……すれ違う時、一瞬見え
た瞳には涙が浮かんでいた。
その涙が脳裏に焼きつき、胸が痛んだ。

（あの子は一体……）

「こりゃ……一体何があったんだ」

少女の事は気になったが、今は彼らへこの場を説明する方が先だろ
う。

……とはいえ一体何人が信じてくれるのか。

「ならこのワイバーンはその子供が1人でやったってのかい？」
「はい」

「……で、その子供はどこに？」

「先程まではいたのですが、もう去っていきました」

「どこへ行ったって言うんだい？」

「……それは私にも分かりかねます」

彼らは疑惑の眼差しで説明を聞いている。

それは仕方の無いことだろう、私だって話だけ聞いたら嘘だと思う。

子供が1人でワイバーンの群れを全滅させました。

それも一瞬で、そしてその子供はもうここにはいません。

どこかへ飛んでいきました。

子供だつてもう少しまともな嘘が吐けるように思える。

けれどそれしか答える事ができず、同じような問答を繰り返す。

アリーという名前を出しても誰も知らなかった事が更に疑惑を強めていく。

(……はあ、どうしろっていのよ)

さすがに疲れてきたのでもう逃げ出そうかと思いはじめた時、新たな声がした。

「道を開けてくれ」

人が増えるという事はまた同じ問答が始まるのか……と、さすがに嫌気がさして本格的に逃げる算段をする。

しかしその姿を見たとき、思わず固まってしまった。

（えっ！ラ、ランスター様！？）

そこにいたのは先程少女との力を比較した王宮騎士のリリース「R」ランスター様だった。

（ど、どうしてこんな所に！？聖都にいる筈では！？）

「貴方ですか、この場にいたのは」

「は、はいっ！」

「ん？どっかで見た顔だな？」

突然の王宮騎士の登場に動揺して気づかなかったが、その声を聞いてはっとする。

（クレスディア団長！？）

そう、彼女の横には騎士団長殿までいたのだ。

その強面な顔とは不釣り合いな飄々とした態度にどこか懐かしさを感じる。

「ん、やっぱりどこかで会った事があるような？」

隊長の悩んでいる声を聞いて再度硬直していた身体を動かし、声を

出す。

「あ、自分は以前、聖都騎士団の」

「あー、そうだそうだ。確か……ペルシュアルトだったか？」

「は、はい！覚えていただいていたようで光栄です」

遮るように言われた団長の言葉に胸が熱くなる。騎士団の人数は数百にも及ぶのだ。

その末席、それも僅か数年程度しかいなかった自分の名前を覚えて下さっているとは思わなかった。

「盛り上がっている所すみません、今は状況説明を」

「っと、そうだったな」

「ええと、ペルシュアルトさんですか。申し訳ないのですが何が起こったのか説明して頂けますか？」

「は、はい。勿論です」

そして先程までと同じ説明を繰り返す。

……緊張して何度か詰まったりもしたが、2人は黙って聞いていた。しかし最後に少女の名前がアリーだったと伝えた時、2人は激しく動揺した。

「……まさかとは思いましたが」

「……ああ、こいつは想像以上だったな」

その2人の反応に思わず首を傾げてしまう。
まるで心当たりがあるような……？

「ええっと、お知り合いなのでしょうか？」

「はい、その少女の事なら知っています」

「知っていますなんて人事みたいな言い方すんなって、お前の従者になるんだぞ？」

「ええええ！？」

これまで従者の希望を全て断っていたランスター様が、遂に従者を取られるだけでも驚きなのに、それが……あの少女だなんて。

「とはいえこのままではそれもできません」

「そうだな……どこへ行つたのかは分かるか？」

「……すみません」

はあ、とため息を吐いた2人にまた胸が痛くなる。

少女が飛び出していった原因は自分にあるように思えて、いたたまれない気持ちになっていく。

しかし、それでも少女に対する疑惑は消えなかった　いやむしろ一層疑惑が強まったと言ってもいい、あの少女は　ランスター様より強かった。それが何故従者に？あの子は一体何なの？

「あ、あの少女は一体何者なのですか？」

「ん？」

「失礼ではありますが……自分の見た所……その、あの少女はランスター様よりも……」

「そうですね。その戦い振りを聞いた限り私より強いでしょう」

（聞いた限り？）

その初めて知るような物言いに違和感を感じる。

「あの、もしかしてランスター様は」

「悪いが話は後だ、今はあの嬢ちゃんを追わねえとな」

「そうですね……ベルに知られたら大変な騒ぎになりそうですし……」

「……だな、宿に置いてきて正解だった」

ベルとは人の名前だろうか？

やけに脅えている2人から礼を言われ、そして去っていつてしまった。

「そもそもどうして飛び出したりなんてしたのでしょうか？」

「さあな……まあ、直接聞けば分かるだろ、魔力は追えるか？」

2人の話し声は少しずつ遠くなっていく。

（私は……どうしようか……）

周囲を見ても一先ず話は落ち着いたようで、人も散らばり始めている。

「姉ちゃん」

話が長くなりそうだからと、先程まで一人向こうに逃げていたカイがこちらへやってきた。

その裏切り者の弟の手元を見て、思い出す。

（……返さないかね）

分からない事ばかりだけど、やるべき事は決まった。

まずはコレを返して、それから話をしよう。

脳裏に浮かぶのはワイバーンの血で真っ赤に染まった少女の姿

……そして最後に見せた涙を浮かべた表情

（どっちが本当の姿なの？）

第15話 告白

そつと地上に降りるとそこにはカイ君とマリーツァさんが呆然と立っていた。

「貴方は何者なの？」

「……え？」

その言葉、そしてマリーツァさんの瞳を見て私は心が悲鳴を上げるのを感じた。

そこには先ほどまでの優しそうな表情は無かった。過去幾度と無く見てきたその雰囲気。

すれ違う人、人、人。全てが私を化け物として見ていた目。

身体がぶつかれば泣いて謝罪してくる人もいた。

話しかけただけで真っ青になり全身が震えだして脅える人もいた。

殺さないでくださいと泣きながら言われた事もあった。

ただ私は普通に接して欲しかったただけなのに

「……貴方は……人間なの？」

「……っ！」

ああ…… やっぱり私は…… 人ではないのだろうか。

私のこの力はおかしいのだろうか。

面と向かって言われて事は無い。

けれど、陰で何て言われていたかは知っている

バケモノ、と。 あいつは人間の面を被ったバケモノだとずっと

言われてきた。

記憶が蘇ってくる、自分のしてきた行い。最低な行為。バケモノの私が一体何を守ろうつていうのか？

バケモノの私が家族なんて作れると思っているのか？バケモノに……私に……そんな資格が……あるのか？

「……わ、わたし……」

「こつちだー！ー！魔物の群れはこつちで見えたぞ！ー！」

その言葉を聞き、もう私はこの場にいる事はできなくなってしまった。

何も考えられず、翼を広げて逃げる。

これ以上そんな目で見られる事には耐えられなかった。過去の自分と向き合う事なんてできなかった……

「こつちで合つてんのか？」

「はい、アリアスの魔力は相当なものですね。普通こんなに強く魔力の痕跡が残っている事はないのですが」

「さすがは救世主って事か。あの話も本当なのかもな」

「……どうでしょうね、アリアスが強いというの分かりましたが、兵を率いるのはまた別でしょう」

「そうだな、まあ聞けば分かるか」

「はい」

深い森の中をアリアスの飛んでいった方向へと走り続ける。幸い空に浮かぶ魔力の痕跡は強く、追いつける事は難しくない。

しかし、そもそもなぜアリアスは去っていったのか、それだけはいくら考えても分からなかった。

外はもうすでに暗く、神経を研ぎ澄まさなければまともに走る事もできない森の中。一体アリアスは何故こんな所に入ってしまったのだろうか？

他に群れがいて、それを追いかけた？ それもなんだか違う気がする。アリアスとはまだ付き合いが浅いが、そんな風に魔物を狩る事に熱心な様には見えない。いや、救世主と呼ばれるくらいなのだ、もしかしたら魔物を狩る時はいつもとは違った雰囲気になるのかもしれない。

答えの出ない問いに、思考がループしかけた時、視界が開けるのを感じた。

森の中の小さな湖、その湖の中にアリアスはいた。

血を洗い流しているのだろうか、服を着たまま胸から上だけを外に出した状態で湖に入っている。しかしその身体は全く動かず、空を見上げているその瞳は虚ろだった。

「……アリアス」

それはとても寂しげで…… 儚げな姿だった。

「アリアスっ！」

アリアスはゆっくりとこちらを向く。その瞳は何を見ているのか。今朝までの元気だったアリアスの顔とはまるで真逆な姿に驚きを隠せない。

「リリースさん、ライオネルさん」

その声に力は無く、本当に同一人物なのかすら分からなくなってくる。

「私は……バケモノ……なのでしょうが？」

「なに？」

「私はずっとバケモノだって言われてきました。この力はバケモノだって、人間じゃないって言われ続けてきました」

「アリアス、何を言っている？」

「……それはこの時代でも変わりませんでした」

「……何か、言われたのか？」

「貴方は人間なの？ そう言われて……私は何も言えませんでした」

「アリアス、君は人間だろう？ 何を迷う必要がある？ 先程の話は聞いた。確かに君は強い魔力を持っているかもしれない。だがそれは素晴らしい事じゃないか。君は魔物から街を守ったんだ。胸を張っていいばいい」

「魔物……魔物なら殺してもいいんですか？」

アリアスの声からは抑揚が感じられず、ほとんど独り言の様に話を続ける。

一体どうしてそんなに傷ついたような顔をしているのだろう。

どうしてそんな泣きそうな顔をしているのだろう。

魔物は人間の敵だ、殺すなければこちらが殺られるというのに、何を迷う必要がある。

「それはそうだろう、魔物は人間の敵なのだから」

「なら……ベルちゃんも敵ですか？」

「それは……いや、ベルは特別な竜だろう。先程のワイバーンとは違うだろう」

「そんなの分からないじゃないですか!!」
「っ!」

突然のアリアスの怒号が響く。

「そんなの違うんですよ! 敵だって言われて、魔物は敵だから全部殺せって言われて殺して、でも、でも違ったんですよ!」

さつきまでとはうってかわった、怒りが込められた強い口調に何も口を挟めず、アリアスの言葉だけが続く。

「外から来た魔物達は何千何万という数でした……それを私は殺したんです。何も考えず、何も思わず、何も聞かず、ただ命令だからって私は殺したんです」

勢いが徐々に弱くなっている、けれど言葉に込められた思いは逆に強くなっている気がする。

悲しみ、後悔、聞いているこちらにも辛くなる言葉が響いていく。

「でも違ったんですよ」

「……なにが……違ったんだ」

「彼らに人間を攻撃する意思なんて無かったんです」

「……なに?」

「生き残った竜が言ってたんですよ……私たちは閉じられた世界が突然開いたから見にきたただけ……それなのに……何故この様な非道な真似をするのだ……って言ったんです……」

「……そんな」

「観光ですよ……ただ観光に来ただけの彼らを私は問答無用で殺したんですよ……そんな私こそ……人の言う……バケモノ……魔物なんじゃないですか? さつきも人が死んだのを見て、私は、街を、

みんなを守らなきゃって思って戦いました。でも、それも間違っていたのかもしれないんです。殺してから……全部終わってから……私みたいなバケモノが守るなんておかしいって事を……目を見て……思い出したんですよ」

アリアスは泣いていた、その青い瞳を涙で溢れさせ、言葉にならない言葉を続けていた。

そんな彼女に私は何も言えなかった……私よりも小さい少女の言葉に返す言葉を……私は何も持っていなかった。

「私に話しかけた竜……その竜は……ベルちゃんの親竜でした」
「っ！」

「親竜の後ろで……ずっと眠っていたベルちゃんを、私は殺す事ができなくて連れ去ったんです」

「……その事をベルは？」
「知らないと思います……ベルちゃんは……親竜が殺されて……自分も殺されそうだった所を、私が助けてくれたって思ってます」

アリアスは全て終わったような空虚な瞳で、

「私は……寂しくて……独りが淋しくて……ずっとベルちゃんを騙してたんです」

全ての罪を告白した。

「ベルちゃん……私は……どうしたらいい？」

そのアリアスの視線の先、私たちの真後ろ。そこには……綺麗な金色の髪をした少女が悠然と立っていた。

第16話 ベル

「ベルちゃん……私は……どうしたらいい？」

宿で待っているように言われたが、外から感じる強い魔力、懐かしいその力はアリーの物だとすぐに分かった。

アリーは戦っている……また……昔みたいに……独りで戦っている。脳裏に浮かぶのはアリーの悲しい顔、疲れたような、絶望しているような、泣き出しそうな……悲哀に満ちた顔。そんな顔を見たくなくて、そんな思いをさせたくなくて、私はアリーの下へ向かった。

そして泉に着いた所で聞こえてきたのは衝撃の事実だった。

アリーは……ずっと私を騙してきたのだろうか。

アリーは全て言い終えたようで、今は私の言葉を待っている。処刑される前の罪人のように、青白い顔で私の言葉を待っている。

だから私はアリーへ告げなくてはならない。

私の思いを、私の気持ち。

「アリー」

私がそう呼ぶと、アリーの身体がビクツと震える。

その顔は恐怖に染まっている

けれど、近づいていっても逃げることは無かった。

ただ、震えながら黙って私を見つめている。

「アリー」

もう一度アリーの名を呼ぶ。

……どうして気づかないのかな、アリーは。

私は今でもアリーと呼んでいるのに

「アリー」

アリアスではなく、アリー。

それは私だけが呼んでいた愛称。

アリーを友人として認めた時に、私にベルという名前をつけてくれた時に、お返しにと呼んだ愛称。

全てを知った上でも、私はこんなにもアリーの事が大好きだというに。

「アリー、大好きだよ」

そつと優しくアリーの冷たい身体を抱きしめた。

「……ベルちゃん……怒ってないの？」

「……正直言うとうまく分かんない。だってもう昔の話なんだよ。親の事もよく覚えてない。でも一つだけ分かった事があるよ」

そう一つだけ、けどその一つがあれば十分なんだよ。

「アリーはずっと悩んでて、苦しんでたんだね。でもね、一つだけ忘れてるよ」

普段は頭がいいのに、こういう時アリーは本当に馬鹿だなんて思う。

「アリーと一緒に居るとね、とっても楽しいよ。それだけでいいんだよ」

「ベル……ちゃん」

「アリーはどう？ もう私とは一緒にいたくない？」

アリーは泣きながら頭を勢いよく左右に振って否定した。
その行動に私は嬉しく思う。

「アリーは考えすぎなんだよ、一人で背負いすぎ。その外から来た魔物達だってさ、突然来たら人が脅えるのは当たり前だよ。魔物は普通の人より強いんだから。人は怖がるし、恐れるよ」

そう、そんな集団で突然来たら警戒されるに決まっている。
彼らはただやり方を間違えたんだ。

「でも……わたしは……ベルちゃんの親も……」

「そんなの向こうも悪かったんだよ、アリーだけが責任を感じる必要ないよ。私たちは完璧になんてなれない。失敗だってするし、間違いだって起こす。それは人も魔物も変わらないよ」

「でも……」

「アリーはさ、ずっと悩んで、苦しんだんだよね。もういいんじゃないかな。自分を許してても。周りになんて言われたってさ、私はアリーの事が好きだよ。だから大丈夫。辛くなったら慰めるし、愚痴があるならいつまでだって付き合うよ。だから少しだけ、もう少しだけ、楽に生きようよ」

「ベ……ル……ちゃん、わたし……ずっと……ごめんね……ごめんね」

アリーは泣きながら、言葉にならない言葉を続けた。
私はそんなアリーをずっと、ずっと抱きしめていた。

第17話 わがまま

「……………あ？」

いつの間にか私は硬い木のベッドの上に寝かされていた。

部屋の窓から差し込む日の光に当てられて、徐々に思考が回復していく。

私はあの後……気を失ったのだ。

「起きたか？」

すると不意に横から声をかけられる。

しかし相変わらず身体は上手く動かない。

これで三度目の身体強化を使用する。

うつすらと全身を包む光。魔力が全身にいきとどいたのを確認して、改めて声がした方へ顔を向ける。

「リリースさん」

横にいたのはリリースさんだった。

ずっとそこにいたのだろうか、木製の椅子に座り、手には小さな本を持っていた。

なんだかその姿がやけに似合っていて、騎士というよりどこぞのお嬢様のように見える。

「今のは、身体強化……？」

「あ、はい。まだ身体が上手く動かないので」

「そつ、なら聖都に行ったらまずは身体を治さないと」

その言葉を聞いて、身体が震えるのが分かった。私は……

「……一緒に行ってもいいんでしょうか？」

「その質問に答える前に、アリアスはどうしたいんだ？」

「私……ですか？」

その質問は考えていなかった。

私はきつとまた疎まれると思っていたから。

ベルちゃんはああ言ってくれたけど、それでも私は不安だった。

「そう、アリアスの希望を教えてください」

「私は……」

「遠慮はいらない。ただアリアスはこれからどうしたいんだ？」

それを聞かせてくれ。子供らしく、わがママを言ってくれればいい」

「わがママ……ですか」

わがママ……そんな風に物事を考えた事は無かった。

いつも私は周りの目を気にしていたから。

自由に自分の願望を言う、それはとても勇気のいる行為だった。

「そうだ、君はまだ子供なんだぞ。子供はわがママ言っただけで困らしていればいいんだ。遠慮する必要は無い」

そんな私にリリスさんはわがママを言えという。

化け物の私に……子供らしくしろという。

……そんな事、無理なのに。

「アリアスはこれから一人の人間として、どう生きていくのか、どんな人生を歩みたいのか……どんな未来を望んでいるのか。そんな話を聞かせてくれ」

未来？

その言葉に疑問を覚える。

そもそも私に未来はあるのだろうか……

「未来ですか。でも私には……命力が」

「まだ分からないだろうか？ 確かに君は結界の魔法により命力を使用した。君の言う通り明日にでも死ぬのかもしれない。けれど、もしかしたらずっと命力は尽きずに人生を全うできるかもしれない。それは君にも分からないだろうか？」

「でも結界を張るだけの大きな魔力です。それを支えるほどの命力を考えると……そんな風に考えられませんか」

そんな風に楽観的には考えられない。

私だけそんな風に生きていけるなんて……考える事はできない。

「はあ、強情だな。ベルにも言われただろう？ もっと楽に生きればいい、難しい事を言っているわけじゃない、ただアリアスの好きな様に生きればいいんだ」

「……好きなように、ですか？」

「そうだ、じゃあ先に私から言おうか。私は今はまだ序列10位と一番下だが、いずれは王宮騎士のトップに立つ。そして聖都を、いや、この大陸を守っていきたいと思っている」

「……きっと、リリスさんならなれますよ」

リリスさんならきつとなれるだろう。

他の王宮騎士がどんな人が知らないけれど、きっとリリスさんはやり遂げる。

私とは違って、とても強い心を持った人だから。

「そして横にはアリアスとベルがいてくれたらと思っている」
「……………え？」

不意に続けられた言葉に思考が止まる。

リリスさんの表情は真剣そのもので、とても冗談を言っているようには見えなかった。

「私は君達といたい。それが私のわがままだ…………アリアスはどうだろう？ 迷惑だろうか？」

「…………リリスさん」

私はまた泣いていた。

なんだかずっと泣いてばかりな気がする。

この新しい世界はとても優しい。

もう100年前とは違うのだろうか。

私はこの優しさにおぼれていいのだろうか。

「アリアス」

泣いている私を、そっとリリスさんは抱きしめてくれた。

前と同じように、抱きしめてくれた。

私の力を知った後でも、私の罪を知った後でも…………変わらずに抱きしめてくれた。

「…………私も…………一緒にいたいです」
「そうか」

リリスさんはどこまでも優しい。

こんな私をずっと気にかけてくれている。
もしかしたらこれは同情かもしれない、ただの哀れみなのかもしれない。

それでも良かった。いまはただこの優しさに甘えていたかった。

そして、私はもう一つわがまを告げた。

何の当ても無いのに、どうすればいいか分からない。けれど私はそれを言わずにはいれなかった。

私の望む未来。

最高の幸せを迎えるにはまだ足りない。

もう一人。

そこにはもう一人必要だったから。

私を助けてくれた人。

血を流しながらも必死になってくれた人。

どんな人かは分からないけれど、とても優しい魔力を持っていた人。

……リリスさんのお姉さん。

エリスさんも一緒に

それが私のわがままです。

第17話 わがまま（後書き）

すみません、更新が遅くなりました……

書いては消して書いては消してのスランプ状態でした。

うう、才能が欲しい。

けれど、詰まっている間は息抜きにちょこちょこ前半部分を直したりしてたので、もう暫くしたら改定していこうと思います。

あんまり追加分が多かったら新しく改訂版で連載するかもしれません。が……その辺は悩み中です。

そして、本編ですがひとまず次回で第一部終了予定です。

その後は第二部「聖都編」を開始予定。

皆さんよろしくお願いいたします！

第18話 望む未来へ（前書き）

一ヶ月ぶりの更新です…遅くなってしまい申し訳ありません…。

第18話 望む未来へ

「じゃあ、行くぞ」

そう言つて御者台に乗ったライオネルさんは馬車を走らせた。

暖かい日差しの中を馬車は走っていく。ゆっくりと走る馬車の窓からは徐々に遠ざかつていく町並みが見えた。

たった数日の出来事なのに、沢山の事があつたように思える。

リスさんと話した後すぐにライオネルさんは部屋にやつて来た。

そして馬車の用意が出来たからと、私たちはすぐに聖都へ向かう事を決めた。

私はまだ病み上がりで、リスさんはもう数日ここで休むべきだと言つてくれたけど、なんでもお祭りの警護任務があるみたいで余り時間がないみたい。悪いが……一言謝られたけれど、元々私のせいで数日街に止まっていたのだから逆に恐縮してしまった。

「身体は大丈夫か？」

物思いに耽っていると、リスさんが声をかけてきた。

狭い客車には細長い木の板が立て付けられて、私とリスさんは向かい合わせに座っている。

ベルちゃんは横で寝ていた。人間形態になるとすぐに眠くなるって言つてたけど、昔の幼竜だった時もずっと寝ていたと思う。姿は違つても、昔と変わらない習性を見て思わず頬が緩む。

「はい、魔力は回復してますから」

「そうか」

そして馬車内は再び静寂に包まれる。

数時間前に出発してから、ずっとこの空気。

重い空気ってわけじゃない、けれど居心地のいい空気でもない。

何かもやもやした、微妙な空間。

それは私とリリスさんの距離を示しているのかもしれない。

聞きたい事はいくらかでもある。

まだリリスさんと出会って数日なんだからそれも当たり前。

だから話をしようと思えばいくらかでもできる。

リリスさんの事。

聖都での事

私のいない100年で変わった事。

知らない事、聞きたい事は沢山ある。

けれど私たちは無言のまま馬車は走っていく。

無言になった原因は私の言葉。

エリスさんと一緒に

思わず口をついて出た言葉。

あの時、助けてもらってからずっと心のどこかで思っていた事。
守護者という役割に対する疑問。

そもそも結界は必要なのだろうか？

自分が守護者になった時は、何とも思わなかった。

むしろ嬉しかった。

この世界から離れられる事に……死んで罪から逃げてしまいたかったから。

だから私は誰にも言わず……ベルちゃんも置いて逃げ出した。

最初は私がやらなきゃいけないって、思い込もうとしていた。結果が無くなった事で沢山の悲劇が起きた……私の罪だけじゃなくて、他にも沢山悲しい事が起きた。沢山の人が死んだから。それは魔物だけのせいじゃなくて、同じ人間同士が殺しあう事も多くなった……だから私は結界を張りなおそうって思った。私しかないって……私にしかできないからって周囲の反対を押し切って一人で結界を張りに行った。

けれど、結界が発動して意識が無くなる瞬間、私は知ってしまった。自分の醜い感情に。自分の弱い心に……気づいてしまった。だって私は安堵したんだ。安堵してしまったのだ。この世界から逃げ出せる事に、罪を忘れてしまえる事に。その時の私はもう家族もベルちゃんの事も頭に無かった。ただただこの世界から逃げ出せる事に歓喜した……

私は……最低だ……

けれど私は戻ってきてしまった。逃げ出した世界でもう一度私は生きる事になった。

だから私は改めて考える。今度こそ本当に、周りのために、人のために、誰かのために力を使おうと。自分の弱さを誤魔化して周りの為について言い訳して力を使うんじゃない、純粋に誰かのために力を使おうと思う。

そこまで考えて最初に考えたのがエリスさんの事だった。私の失敗のせいで守護者になってしまった人。

私の弱さの犠牲になってしまった優しい人。リリスさんのお姉さん。私はエリスさんを救いたい。もう一度エリスさんに会ってちゃんと

お礼をしたい。

エリスさんに助けてもらえた事、そしてリリスさんと出会えてどれだけ私が嬉しかったか、私はあの人に伝えたかった。

けれど今はまだ何もわからない。

私にはどうすればいいかわからない。

それなのにリリスさんに希望を持たせるような事を言ってしまった事に少し罪悪感を覚えたけれど、それでも私はリリスさんに伝えたかった……私の気持ちを、私の理想の未来を……知って欲しかった。リリスさんは何か考えているようで、ずっと難しい顔をしている。私はリリスさんには笑っていて欲しかったけど、どうすればいいかわからなくて、俯いて手元を見つめていた。

アリアス人形

私は救世主なんかじゃない……醜くて弱い人間……

カイ君はこれを返してくれた時……笑ってた。

ワイバーンから街を救えた事に、何より姉が傷つかなくて済んだことに……笑ってた。

結局マリーツアさんに会うことはできなかったけれど、カイ君の笑顔で、私は胸の棘がずっと消えるような思いがした。

私のやった事で誰かが喜んでくれた。

それが何より嬉しかった。

……醜くても

……弱くても

……バケモノでも……この力に意味があるのなら……

馬車は走る。

私の知らない聖都へ向かう道を走っていく。

これは新しい未来へ繋がる道。

一度は諦めた未来。

一度は捨てた未来。

……絶望した筈の未来。

それが再び繋がっていく。

何も見えない暗闇だった筈の未来に光が差し込んでくる。

（頑張ろう）

そう、頑張ろう。

諦めずに、放り投げずに、自棄にならずに、頑張ろう。

救いたい人がいる。

一緒にいたい人がいる。

一緒にいてくれる人がいる。

笑ってくれる人がいた。

助けてくれる人がいた。

許してくれる人がいた。

そんな優しい人達と一緒に、頑張ろう。

私の望む未来を……今度こそ笑顔でいられる場所を作るために。

第18話 望む未来へ（後書き）

今回の話で第一部終了です。

次回から第二部「聖都学園編（仮）」を開始予定。

ただ今回はちゃんと話を考えてから書こうと思っているので、暫く更新停止します…ただでさえ更新が遅く、読んでくださっている方には本当に申し訳ないのですが、少しでも面白い話を書くよう頑張りますので、よろしく願います。

それとすでに投稿済み部分に関して、これから少しずつ修正作業をしていくつもりです。

……あまりにもおかしい部分が多すぎるので（苦笑）
そんな行き当たりばったりな作者ですが、これからもよろしく願います。

第19話 新しい場所は（前書き）

第二部スタートです。

というか約三ヶ月ぶりの更新って…遅すぎですね…ごめんなさい。
今後はもうちょっと頑張ります。

第19話 新しい場所は

（どうしてこんなことになっているのでしょうか？）

アリアスは困惑していた。目の前にいる30人もの少年少女、その視線はアリアス一人へと向けられていた。

それは大部分が好奇の眼差しであったが、数人ではあるが嫌悪の表情を隠そうとしない者もいた。

10歳〜16歳の男女が通う『聖都ランネルフ教導校』

その中でも15歳以上で、優秀な生徒のみが選出された上級クラス、主に騎士となる学習をする『騎士教導科』

他にも幾つかの学科が存在するが、教導校一番のエリートコースである騎士教導科で転校生が来るというのは開校以来始めての珍事であった。

このクラスの生徒は皆、これまでエリートに相応しい教育をされており、その中へいきなりやってこれるほどこのランネルフ教導校は甘くない。

まだ教導校というものが存在して60年。その歴史は浅く、最初はただ、戦闘技術を教えるものだったが、今では語学や歴史の授業、礼儀作法といった教養まで教える、人間的な成長も一つの目的となっていた。その為、名目上転校生を受け付けているとはいえ、そのレベルの高さに、全ての受験生は落とされてきた。また、年齢さえ満たせば建前上は全て子供達が入学できる権利をもっているのだが、その学費の高さは異常であり、初年度から卒業まで通った場合、一人の学費で中流一般家族が一生を楽に過ごせるほど。そのため結局は貴族の子供が殆どになってしまっている。結果、入学したその日から周囲のクラスメイトは殆ど貴族同士で何らかの繋がりを持っている者が多い。それがなお更転校生、それも見たこと無い相手という未だかつて無い状況に生徒は浮き足立っていた。

そして当のアリアスはというとお姉さんお兄さんたちの好奇心な視線に晒され、所在無さげに立たされていた。

「では、自己紹介を」

まるで見世物みたいな状況にどこか可笑しかったかな、と内心冷や汗をかいているアリアスに対して、横に立っている中年の男性、このクラスの教導官であるオルソンは淡々と話を進める。

（だ、だいじょうぶ、かな？）

正直どこか可笑しいどころの話ではない。可笑しいどころだらけで、むしろ自分としてはどこから突っ込めばいいの？ といったレベルの話だ。

けれど、今はそんな事を考えている場合じゃない。内心の動揺は出さず、第一印象は笑顔だと教えられていたので、無理やり笑顔を作る。

すると何故か数人の女生徒は顔を赤く染め、潤んだ瞳を浮かべる。それはどう見ても恋する乙女のものだったが、アリアスはそんな彼女達の心境に気づく余裕もなく、引きつりそうな口元を無理やり押さえつけて素早く挨拶をする。

「は、初めまして、あゆ、アルトと……言、います。」

そこには緊張した面持ちでうつかり噛んでしまったため恥ずかしそうに立つ、長身の美少年が立っていた。

第19話 新しい場所は（後書き）

と言うわけで、第二部スタートです。

二部は一部とはまたちよつと違った雰囲気になるかもしれませんが、皆さん宜しくお願いします！

第20話 お城へ

村を出発してから三日、ようやく聖都が見えてきた。聖都を囲う石造りの防壁。その向こうに見える城の姿に、アリアスは懐かしさを感じていた。決して幸せとはいえない、むしろ辛い思い出ばかりだった聖都での生活。それでも家族といた時だけは笑っていた気がする。アリアスの脳裏には、優しかった家族と過ごした懐かしい聖都の思い出が蘇っていた。

（そっといえば、家はどうなったんだろう？）

一応貴族ではあったが、それほど裕福な家では無かった。平民と同じまではいかないが、使用人も数人しか雇えるお金が無い生活だった。アリアスが魔物を倒しても、王は「貴族が民の生活を守るのは義務」と言い、褒賞を与える事はなく、またその事実も民衆には伏せられていた。王族はアリアスの力を恐れ、冷遇していたのだ。下手に褒賞を与え、もし彼らがアリアス個人の力だけでなく、私兵を持った時、彼らは王族へ反旗を翻す可能性がある……と。過ぎた力は、周囲の人間を必要以上に恐れさせる。それほどアリアスの力は異常すぎた。アリアス一人で一騎当千の英雄として扱われることの無いよう、民には騎士団の功績としていたのだ。

けれど、アリアス自身はその事はなんとも思っていなかった。むしろ家族が近い生活が性に合っていた。だからこそ家には愛着があったし、その後の家の事が気になっていたのだった。

（ベルちゃんは知ってるかな？）

そっといえば私がない間ベルちゃんはどうしていたんだろう？

そんな事を考えていた時、外が何やら騒がしくなっている事に気づいた。馬車がいつの間にか止まっている。

「何かあったんですか？」

「ああ、大した事じゃない。むしろ予想通りかな」

「そうなんですか？」

そのよく分からない答えにアリアスは困惑した表情を向ける。その表情の意味に気づいたのか、リリスは苦笑を浮かべながら、どこか楽しそうに話し始めた。

「貫禄が無いから分からないかもしれないがな。最初に名乗った通りライオネルさんは騎士団長だ」

「はあ」

「うん、やっぱり分かってないな。いいか、騎士団長っていうのは騎士の中で一番偉いんだ」

「偉いんですか」

「そう、偉いんだ。王宮騎士を除く、聖都の騎士のトップ。それがライオネルさんだ」

「えーと、偉い人が現れたからみんな騒いでいるんですか？」

「ちよつと違うな、そんな偉い人が御車なんていう下っ端の仕事をしているから騒いでいるんだ。偉い人にそんな仕事させられませんか、他の騎士が代わりますって騒いでるのさ」

「なるほど。って、あれ？ でもじゃあ王宮騎士のリリスさんはもつと偉いって事ですか」

「一応な。とはいえ私も以前はライオネルさんの下で指導を受けていたんだ。その恩義がある。今さら偉そうになんてできないさ」

と、どこか懐かしそうな顔で話すリリスさん。その横から、感情を感じさせない、平坦な口調でベルちゃんが口を開いた。

「人間は複雑だな」

「ベルちゃん？」

「強いやつが偉い。それでいいだろう」

「それもある意味では正しい。けれど、強さにも種類がある」

「種類ですか？」

「そうだ、個人としての強さなら私の方がライオネルさんより強いかもしれない。けれど、集団戦では別だ、あの人は人を使うのがとても上手い。そんな周りを使う強さもある。誰かを指導したり、引っ張っていく能力で比べたら、私なんて足元にも及ばないさ」

「ライオネルさんってすごいんですねえ」

「ああ、私の尊敬する人だ」

「……強さだけではない……か」

そうベルちゃんが一人ごちる。そんな会話に一区切りがついた時、馬車の扉がゆっくりと開いた。

「いやあ、まいったまいった。あいつら人の言う事なんて聞きやしねえ」

頭をポリポリとかき、困ったように笑いながらライオネルさんが馬車に入ってきた。

「仕方ないでしょう。彼らの思いも汲んでやって下さい」

「つつてもなあ、別に御車ぐらいで騒ぎすぎだろ」

「ご自身の立場を自覚して下さい。彼らにとって貴方は憧れでもあるのですよ？」

責めるように言うリリスさんの言葉を、ライオネルさんはため息をつきながら聞いていた。

「そんなもんかね」

「そんなもんですよ」

そして馬車はガタガタと揺れながら、ゆっくりと街の中へ入っていった。しかし城門を抜けるその直前、馬車はまたその歩みを止めた。ライオネルが外から呼ばれたのだ。

「あゝ、悪い。ちつと野暮用だ。リリース、報告は任せた」

「構いませんが、何かあったのですか？」

「いや、そんな深刻な話じゃない。いつもの事だ」

「なるほど。ライオネルさんも大変ですね」

「もう慣れた」

そう言い残すと、ライオネルはさっさと馬車を降りていった。話についていけないアリアスとベルは、その様子を首を傾げながら見ていた。

「ああ、すまない。じゃあ行こうか」

「いいんですか？」

「ん？ ああ。気にしなくていい」

「はあ……」

よくわからないけど、仕事なんだろう。とアリアスは解釈し、深くは聞かない事にした。そして今度こそ馬車は城門を抜け、城の敷地へと入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908m/>

使命を終えた 天使の使命

2011年8月5日03時31分発行